

澤水法語

澤 水 法 語

田
中
寛
洲
訳

目次

一	白骨無常を示すこと	7
二	誰もが心を明らめる修行をする必要があることを示すこと	11
三	修現者に示すこと	15
四	経中の妙語を示すこと	17
五	参学の徒に示すこと	18
六	平常三昧を示すこと	21
七	人として道がなければならないことを示すこと	22
八	日蓮宗の信士に示すこと	26
九	諸人に三大事あることを示すこと	30
十	悟りに賢愚のないことを示すこと	35
十一	来参の人に示すこと	36
十二	工夫疑団を示すこと	37
十三	悟証の上に大事あることを示すこと	40
十四	和光行脚の時に好学の者に逢うことを示すこと	46
十五	大疑工夫を示すこと	49

十六	浄心妄心を示すこと	50
十七	悟りに古今の別がないことを示すこと	52
十八	拔隊法語の最初の行を示すこと	54
十九	分別妄想の分別を示すこと	57
二十	近侍の僧に示すこと	58
二十一	文字のこと、山居の可否を示すこと	60
二十二	戒行を示すこと	61
二十三	釋尊在世の時の教化の仕方を示すこと	62
二十四	学問の次第を示すこと	64
二十五	絶学の次第を示すこと	65
二十六	儒釋道の次第を示すこと	66
二十七	白骨の大厄 <small>たいやく</small> を示すこと	67
二十八	学徒の日頃の用心を示すこと	68
捨	遺	72
跋		82

一、白骨無常を示すこと

師が或る日、出家と在家の人々に示してこう言われた。人々のこの人生のはかないこと、この身のはかないことは、まるで夢のようであり、泡や影のようである。出家は夢の中でしばらく寺を持ち、在家は夢の中でしばらく妻子を持ち、夢の中で種々の艱難辛苦をし、夢の中でしばらく色々の歡樂を好むようなものである。この人生のはかないことは、何とも喩えようもなく、言葉にも言い表しがたいほどである。

この道理をよくよく聞かないうちは、どれほど利発な人でも、はかないという事実を本当には思わないものである。ただ何百年も生き続けてこの世に存在するように思ってしまう。その結果、色々なたくらみをしたり、数々の悪しき心や念を増長させてしまうのであるが、それは結局この身がはかないことを思わないがためである。

昔も今も人は皆、口では夢の世界とか一生は限られているとか言っているが、自分のこの身が現実にはかない仮りのものであり、賢愚や貧富、貴賤や老若の人々が、いずれも遂には死んで白骨となってしまうことははっきりわきまえない。知っている路に迷うというのは、このことである。

ただ日々の生活にのみ深く気を使って、この身がはかないことを、一生のうち一日片時なりとも真剣に考えたこともなく、（この身のはかなさを解決する）解脱げだつの道があることも知らず、神道の極意ごくいはどういうことか、儒道の極意はどういうことか、佛法の極意はどういうことかということをもわきまえず、ただ明けても暮れても目の前のことのみに頓着して、遂には一生の罪業ざいごふを身にまとって地獄の苦しみを受けるというのが、世間の人のほとんどの有りさまである。

この人生のはかないことは、父母や師匠や先輩といえども、一度は白骨となり、夫婦とも遂には白骨となり、兄弟や友人や一門や家族もみな同様に白骨となる。先になるか後になるかの差はあっても、一人も生き残る者はない。外ほかのことには当りはずれがあっても、白骨となることは一人の例外もないのである。

しかも年をとるまで無事息災であるという保証もなく、二十歳でも死に、三十歳でも死に、或いは三、四歳でも死に、胎児のときでも死ぬ。たとえ七十、八十年、さらに百年、二百年、千年、二千年、長生きしたとしても、結局はまた死んで白骨となってしまう。この身のはかないことは、どの人もその通りである。如来が經典の中で「老少不定ふじょうふてい」と説かれているのは、このことである。

金銀衣服に栄華をきわめて、一生貯え求めた器物や財宝を、孫に譲り子に譲ったとしても、その孫もその子も遂にはまた白骨となり、親に先だつ者もあれば、子におくれる者もあり、しばらくあとまで長生きしたとしても、遂には又だれしも白骨となってしまう。

このように、この人生のはかないことは、今初めて有ることではなくて、昔からの世の常である。このような道理は、大涅槃經をはじめとして如来がことごとく説き尽されており、老僧の個人的な意見ではない。

たつたいま臨終になるつとするとき、一体何を頼りとすればよいのか、薬の力も佛や神の力も最早なすべがない、妻子眷族もその苦しみを代わることができない、金銀財宝もこのときに至つては何らの役にも立たない、ただかねてから心がけていた信心の一事だけが、このときの頼れる力となるはずである。

平生ただこのわが身のはかないことをよくよく思わねばならない。夜が明け、日が暮るにつけても、この人生は仮りの宿だと思い、時を知らせる鐘を聞くにつけても、この人生は仮りの宿だと思い、老いも若きもいずれも死に行くのを見るにつけても、わが身のことを思ふべきである。

今日は人を弔い、明日は人に弔われるということを、よくよく思わねばならない。常日頃このようにしていれば、無益に苦しむ心も自然にやわらぎ、悪しき心や念も次第になくなり、信心の志が日々に深くなるものである。

常日頃この身がはかないことを思うときは、親に不孝である者も自然に孝行の志が起り、主君に不忠である者も自然に忠節であるようになるのは、このわが身もはかなく、親の身もはかなく、主君に仕えることとつかの間の主従のはかない身であると、日頃から合点しているがためである。

少しの間でもこの身のはかないことを忘れ、人々が白骨となる道理を思わない時は、まるで何万年も生き永らえるように思いこんで、ちょっとしたことに腹を立て、あるうことが親にあたり、自分を忘れて主人に不忠をする。親の顔を見るのもただつかの間のこと、主君に仕えるのもただつかの間のこと、夫婦関係もただつかの間のこと、兄弟友人関係もただつかの間のこと、このように常々思うならば、一切が自然となかむつまじくなるものである。

そのように常々思うときは、上を敬つ心がおのずから生じて、下をあわれむ志が自然に起るものである。自分のこの身がはかないという道理をよくよく合点するときには、どれほど厳しい勤めや役目も少しも苦にならず、どれほど貧しい生活も少しも苦にならないものである。

さて、そのように志を確固として本心を明らかにしようとする工夫信心があるときは、まことに人間に生まれた甲斐があるというもので、申し分のないほどである。その信心というのは、拔隊法語の工夫信心である。これこそ佛法信心が数多くある中の極意であり、如来の四十九年の説法の要である。佛法のみならず、諸道の根本至要である。拔隊の法語をよくよく拝読しなければならない。

二、誰も心を明らめる修行をする必要が

あることを示すこと

或る人が来り参じて問うて言うには、佛法信心のことですが、私は元来武家の生まれですから、佛法を信ずることはふさわしくない。佛法信心や坐禅工夫はただ出家のみがなすべきことで、在俗の我々がしなければならぬということとは、どうも合点が行きません。

師が言われた。それは佛法という言葉の真意を、いまだ明眼みょうげんの師から聞かれたことがないための誤解である。佛法という言葉の真意さえ、容易には知られ得ないものである。一切の経や論、諸子百家をことごとく記憶している大学者といえども、知ることは難かしい。

元来佛法は、分別学解ぶんべつがくげのよく及ぶところではないからである。それゆえに教外きょうがいの玄旨けんしと云うのである。円覚経には、善知識や善友を尋ね求めねばならないとはあるが、学者を尋ねよとは説かれていない。

たとえば字がうまく、諸経を広く見て、詩や文章に達者であるからといって、知識とは名付けない。知識というのは、一句一字を学んだことがなくても、実に佛祖のごとく根本の一心を明らかにした人を、知識というのである。こういうことも、聞いたことがなければ考え違いすることが多い。

さて、佛法というのは、貴賤や男女の区別なく、草木瓦石に至るまでそれぞれが十分に具そなえている佛法であり、何も出家だけが信すべきことではない。

ただ今手を動かし、足を動かし、目に色を見て、耳に声を聞いている、こつして老僧が庵室へ来たり去ったりする。これは一体何の道理であろうか。これこそ人々具足にんじんくそくの佛法の妙用みょうゆうに外ならない。

佛法というのは人々の一心の名である。一心の名であるということを知らないで、自分は出家ではないから佛法など信じ難いと言ったり、そり憎んだりすれば、それは取りも直さず自分の一心を嫌い憎むことになるのである。これは大層愚かなことではないか。

もし儒者の身でありながら佛法をそしるならば、それは儒道の極意ごくいをいまだ知らない人である。神道の人が佛法をそしるならば、それは神道の極意をいまだ味わったことのない人である。佛法者でありながら儒道や神道をそしるならば、それは佛法を夢にも知らない佛法者である。（ましてや）佛門中で相対立して宗論を争わせることは、語るに足らぬまことに恥すべきことである。

そのゆえに、佛法は武道の極、歌道の根本である。その他の諸道百芸も、その究極的核心に到つては、すべて一心に帰着するのである。

さて坐禅工夫は、しっかり坐禅しながら、耳で聞く主を工夫しようと思つ人は聞く主を工夫し、その外、古則公案のいずれでもよいから、ただ一則の公案をはつきりと定めて、路みちを行くにも工夫し、寝てもさめても深く疑いを起して工夫すべきである。

工夫疑団というのは、知ることのできない所を深く考えることである。深く考える所を、工夫とも、坐禅とも、疑団とも、観法とも、観念とも、禅定とも、思惟とも、三昧とも、大信心とも、大菩提ぼだい心とも言うのである。そのほか工夫の異名は枚挙まいきよにいとまがないほどである。

坐禅のことであるが、坐っているばかりを坐禅とは言わない。行住坐臥を通して深く公案を疑うのを、真実の坐禅というのである。どれほど長坐不臥で端正に坐っているといっても、深く疑う心がなければ、坐でもなく、禅でもなく、黙照の邪禅である。

六祖大師は、「道は心に由よつて悟る。どうして坐に在るであらうか」と言われている。このことから知らねばならない、坐禅はただ深く疑うことをさせて、自性じじやうを悟らせるためだけの方便なのである。

悟りというのは、一心を明らかにすることである。明らかにするとは、自分の心が明らかにしたということである。従つて、一心があるものは、一心の修行をしなくてはならない。(それは)武家は武道の中で工夫をし、百姓は耕しながら工夫をし、貴賤や男女もその職業に従事しながらなさねばならない佛法信心である。

そうであるから、信心とはまことの心と書くのである。まことの心となって困るという人は、諸宗諸道諸芸のうちで一人もないはずである。一心を明らかにせず^{よしま}に心が暗くて邪で善いという人は、諸宗諸道諸芸のうちで一人もないはずである。このことから知られるのは、佛法信心は世間一切の人のすべてがしなければならぬということである。

佛法とは一心の名である。信心というのは自分の一心を信じることである。坐禅工夫というのは、格別に変ったことであるかのように人は皆思っているが、ただ一心を明らかに磨く^{みが}ための修行にほかならない。この工夫信心は、手足を使うこともなく、道具も必要ではなく、ただ心で行なう信心であるから、佛法信心が数多くある中でも、最も行ない易い信心である。

もし実際に工夫をして、大疑がにわか^{にわか}に破れ、大悟発明するときには、抜隊法語にあるように、一字を見ることなく、七千余巻のお経を一度に読み尽くすことができる。七千余巻というのも、ほんの一部に過ぎない。儒道の一切の書物や神道や歌道の書物など、あらゆる書物の真意をことごとく徹見することができる。

老僧がこのように言うのを少しでも疑う人は、直ちに自分が大疑団^{だいぎだん}を起し、即今自性^{じよんじやう}を見得して知らねばならぬ。古人は、「終日喫しても未だ曾て一粒の飯を食べたこともない。終日歩いて未だ曾て一片の地も踏んだことがない」と言っている。実にこの言葉通りの境地に到れば、たとえ百万騎の敵陣にひとり飛び込んだとしても、前後左右に人がいるとも思わないであろう。何と痛快なことではないか。

三、修現者に示すこと

或るとき、修現（驗）者が相見（あひけん）して、問うて言った。自分は真言の法印から阿字觀の指南を受け、祈念するとき一心に阿字に集中すれば、不動の心境となって大層得るところがある、とうけたまわりました。これは本当でしょうか。

師が言われた。その通りである。修現者の家風は、もともと心を究める修行に専念する行き方で、ことごとくよい定めである。役の小角居士は心の工夫と信心を専一に勧めたので、今に到ってもその名が日本国中に鳴り響いているのである。いずれもその元祖の定めは浅薄なことではない。最近はまだ祈禱（きとう）を根本と見なしているが、これは大きな誤りである。

不動という二字の意味を語ろう。不動というのは元來人々の自己の一心の異名である。不動明王を本尊とし手本として、役の行者の教えの通りに心の修行をして、不動と我とが一体になるべきであるのが、修現者というものである。

不動とは動かずと書くが、何ものが動かないかと言えば、人々のこの根本の一心が、世間一切の頓着すべき事柄に出くわして、少しも動じないことである。貧の苦しみに会っても少しも動ぜず、富貴に会ってもこの一心が少しも動ぜず、愁いに会っても少しも動ぜず、慶（いひ）びに会っても少しも動ぜず、色慾（しきよく）に会っても少しも動ぜず、金銀財宝を見てもこの心が少しも動ぜず、大病の苦に会っても少しも動ぜず、臨終のとき

きも心が大いに安穩あんのんで少しも動じない。このような境地に十分到達したことを、取りも直さず不動明王と言っているのである。

このように十分に到った人を成佛と名付け、大善知識と名付け、如来といい、安養世界に生れるとも言っているのである。このように十分に到った人を、儒教では聖人とも君子とも天命に達するとも言っているのである。

大乘の説では、直じきに一心を明らかにして成佛せよと説かれるのであり、死後の成佛と云うことは、更に一句も説かれていない。

小角居士おすぬは力量のある人なので、その教えは全て大乘である。また、大峰おおみねというのは、山の名とばかり心得てはいけけない。『臨終心鑑抄』には、「一乗菩提ぼだいの大峰に入って、大事因縁を知らねばならぬ」とある。直に人々の一心を指して、「一乗菩提の大峰」と云ったのである。有相うそうの（山という形のある）大峰のみにしがみついてはいけけない。

ところで阿字を工夫するには、阿の一字を大いに疑わなければならない。歩いていても疑い、坐ついても疑い、寝てもさめても、常日頃深く疑うべきである。工夫が忽然しつねんとして破れたならば、不動と自分とが別ものではないことを知るはずである。このとき初めて、何を金剛界、胎蔵界と云うかがわかるであろう。

なおまた工夫用心については、抜隊法語を見られるがよい。

四、經中の妙語を示すこと

師が或る夕方、修行者達に示して言われた。如来は金剛經の中で「世界というのは世界ではない、これを世界と名付ける」と申されている。師はまたため息をついて嘆かれて言われた。この句の真意は甚深微妙である。残念なことに知音（その消息に通達する人）は稀である。

禅者達よ、懈怠なく大工夫をすべきである。実に自性を明らかにしたときは、これらの妙語は、まるで掌中のものを見るかのごとく分明（明白）となる。「世界というのは世界ではない、これを世界と名付ける」というが、何と甚深なことか。臨済禅師は、「山僧の見処から見れば、釋迦と別ではない」と言われたが、実際に悟ってみれば、如来と兎の毛ほどの違いもない。生死事大、無常迅速である。綿々密々に工夫をすべきである。

五、参学の徒に示すこと

或る僧が来参してご垂誡の言葉を求めた。師は示して言われた。出家というのは、元来重要な役人である。というのも、出家という語の意味は、三毒無明の家を出離することである。無明の家を出離して、佛祖の恵命えみょうをつぎ、一切の衆生を導いて成佛の實際の田地でんちに到らせる役人である。

その為に、最初から父母に仕えず、俸禄を求めず、耕作を事とせず、売買に従事せず、ただ頭陀ずだの心境で、心の修行のみに専念するのが出家である。

年齢の老若に関わらず、剃髪するのと同様、心中の量り知れない欲求や憎愛や怨恨などという、俗人であったときの心をすべて剃り落して、工夫専一の心となって、諸方を行脚あんぎゃして諸善知識を歴訪して、自己の一心を佛祖のように究明して、佛祖になり代わって一切衆生を済度すべき大役人である。

この故に、釋尊はお経の中で次のように説かれている、實際に一心を明らかにしていない限りは、寺も住处も定めることなく、水面みなもに浮かぶ浮草のような積りで、善知識や善友を求めよ。もし明師に会ったならば、その教えに少しも背そむかずに、自分の私心を優先することなく純一に修行せよ、と。

釋尊が後世の修行者たちのために示されたこのような大悲心には、粉骨碎身しても恩に報い難いほどである。そのほかの達磨大師、六祖大師、臨濟禪師も、皆その通りである。

その流れを酌^くみながら、ぬくぬくと着こんで、飽^あくほど食べて、根本の一心を究明せんとする志がないとは、一体どういうことか。釋尊は、一心を悟っていない僧を、こつもり（のように取るに足らぬ）僧とか法賊と呵責されたが、そういう僧は慙^{ざん}愧せずにはおれないはずである。

釋尊は、在家であつても、自己の本心を明らかにした人を有髮の僧と賞讃され、女人であつても、悟った人を变成^{へんじょう}男子と説かれ、男子であつても、悟っていない人を女人と説かれている。

ところが、身に佛衣を着け、佛弟子と称して十方の信施を受け、心の修行は夢にも行なおうとはせず、そればかりか、大寺の住職になることを念願したり、名誉や利財を求めて空しく月日を過^{すご}すようなことでは、法賊と呼ばれて然るべきではないか。

問答商量の機用^{きよう}や即席に偈頌を作る働きは、臨済や徳山かと思まがうほどではあるけれども、その心中を探ってみれば、色慾に溺れ、金銀を求め、美食をむさぼり、病苦に悩まされ、生を愛して死をいとう。一体これが出家と言えようか、禅宗と呼ばれようか。

禅とは一心佛性の名であり、専ら心が明了になったのを、禅宗と言つのである。昔、禅宗と律宗とが渾然^{こんぜん}一体となっていたとき、百丈禪師は、律宗の影響で後代の禅が教律に墮^おすることを危惧して、禅の一宗を格別に立てられたのであるが、これはまことに深い意味があることである。

工夫はいずれの公案にせよ、ただ一つの公案をしつかりと定めて、深く疑わねばならない。大疑の下に大悟がある。兎の毛ばかりも自己の分別を加えたならば、百年間坐禅しても徹底することはない。明師の指示に背くことなく、ご銘々が工夫したならば、百人千人の人でも、悟らない人がいるはずはない。

また実際に大悟した人は、直ちに般若の大智に到るわけであるから、今さら何が不足だと思って、敢えて文才を学ぶであろうか。

老僧は幼い頃から禅定三昧の一本槍で、実に一句一字も学んだことがなかったが、今日どれほど雄弁で博学の人がやって来て、朝から晩まで、四方八方から難問難句を問い詰めて来ても、全く意に介しないが、これは一体何の力であろうか。

老僧は世間的なことは幼い頃より学んだことはないが、佛道に関することは、どれほど高いレベルであろうと、どれほど深いレベルであろうと、難問をあげかけて来ても構わぬ、どうして説き惜しみをしようか。

とはいえ、これは老僧の手柄でも何でもない。もともと出家は、佛祖に代わって法柄をとり、佛祖の教え通りに後進の人達を済度すべき導師であり、いずれも出家はこのように有るべきだからである。老僧は見ての通りの老年で、明日死んでも不思議ではない。ただ真心を尽くして真実をこのように説くだけである。どうか勇猛心を奮い起して精彩をつけて工夫して頂きたい。

六、平常三昧を示すこと

或る僧が参見して問うて言った、和尚様、日頃は青天白日のごとき心境でしょうか。師は答えて言われた、維摩經には、「法に比較はない」とある、この佛性が白日のごときか青天のごときか、そんな比較は断じてない。

僧はまた問うた、和尚様、日頃は工夫をしておられますか、或いは工夫せずにおられますか。師は言われた、悟了分明なときは、今は工夫をしているとか、今は工夫をしていないとかいう区別はない、平日が三昧であり、甚深微妙である。

僧はまた問うた、和尚様、日頃睡るときと睡らないときは同じことですか。師は言われた、眠るときめるという区別はない。他人の目には、老僧が今眠っていると見えても、眠ることは元来眠ることではない。他人の目には、老僧が今動き働いていると見えても、動くことが元来動くことではない。このような境地になれば、ぐっすり眠りこんでいる中に目ざめの動きの全体があり、めざめの動きの中にぐっすり眠りこむことの全体がある。甚深であることはこの通りである。

大徳よ、自己に返照退歩して大工夫をすべきである。道元禪師の法語に、「皮肉骨髓が終には死ぬものではないことが分かるであろう」とあるのを、「ご存知ないのか。往々にして誰も、この自性には生滅はないがこの身には生滅があるように思っているが、これは大きな誤りである。もともとこの身にも毛頭ばかりも生滅の相もなく、動静の相もない。幸いなことに大徳は道元禪師の流れを汲む曹洞宗の僧侶である。どうか勇猛心を奮い起してしっかりと修行してもらいたい。」

七、人として道がなければならぬことを示すこと

師は或る日、出家と在家の衆に示して言われた。春も過ぎ、夏も終り、秋も半ばとなって、今日は八月十二日となった。このように春夏秋冬、時々刻々に移り変って、月日は一寸の間も人を待たず、なかなか間断があるものではない。

元来、月日と人の身とは同じ様な有り方であって、春夏秋冬の季節だけが移り変わるのではない。人々の命もまた一日一日と変化し、一日が過ぎれば、一生の寿命が一日分だけ減り、一月が過ぎ終れば、一生の寿命が一月分少なくなる。この故に梵網経には、「人の命の無常なことは山の水より以上である。今日は有るといつても、明日はどうか分からない」と言っているのである。

こういうことは千偏も百回も耳に聞いたり口で唱えてはいても、実際に自分自身のこととは思えず、或いは書物の上のことと思ひ、或いは昔のことと思ひ、或いは他人のことのように思っている。

ご銘々が常日頃よくご覧なさるがよい。春夏秋冬の天候に関わりなく、老少も貴賤ももるとともに、焼場の煙が絶えることはなく、寺々の墓に埋めた土が乾く暇もない。このように人々は無常ではなく、一人も生き残る人はいない。

このために、昔から儒道は連綿と引き続いて人の道を教え、佛道が有って解脱を導き、神道が有って諸道を尽くさせるのである。このように諸道が成立して来たことは、どうしてもよい無駄ごとではない。どの道からでもよいからその道に入って、その祖やその師の教えに随って、いささかも自分の私的な分別を混えることなく、道を修するべきであり、人間で有る限り道がなければならぬのである。

ただ毎日食うことと世渡りにのみ深く執着して、一生を朽ち終ることになるのは、残念なことである。虫や鳥などが日々に飛び東に飛んだりしているのは、結局何のためか。それはただ餌を求め、妻子を求め、住居を求める心があるからである。鳥や虫のたぐいでも、その日を暮らすのはすでに自在を得ているのに、人間でありながら鳥や虫のまねだけをしていてよいのであろうか。

たまたま人間に生まれ、慈悲や善悪をわきまえる身であるから、心の修行に専念して安心解脱を得ることこそ、人間に生まれた甲斐があるというもので、これ以上の喜びはない。

心地修行とは、常日頃坐禅工夫して、実際に自心を明らかにして成佛を得ることを言う。大乘の説では、死後の成佛のことは一言も説かれてはいない。この身が丈夫で食事も快適にとれるうちに、深く信心修行して、生きながら成佛を遂げることだけが説かれている。

これこそが佛法の真説にして成佛の近路であり、少しの方便も加えていない。老僧が常日頃示しているのは、大乘のうちの又大乗、つまり最上乘の真実の法である。直接釋尊にお目にかかって、成佛の本当の道を問われても、釋尊といえどもこの外に一句も説かれることはないはずである。

佛法のみならず、儒道には静坐工夫があり、神道に静心や安坐工夫がある。そのほか医道や軍術に到るまで、いずれも一心をもつて極致として、それぞれの工夫がある。ただその書物や所によって、その名は異なるとはいえ、一心の工夫以外のことを説いているのではない。

これによって孔子も智と行の二つを説かれて、「たとえ智があっても行がなければ、ちょうど片方の羽のない鳥のようなものである」と言われている。また孔子は、門下の十哲の一人を批判して、「彼は礼の道にならなっているが、いまだ義を尽くしていない」と言われているが、このように門下の者を責められたというのは、結局どういふことであるか。

また神道の書物の要語には、「一心の定まる標準が明らかになれば、すなわち天の命^{めい}にかなつ」とか、「人というのは天の下の子である」とか、「天地の神と同根である。天地の神と同根であるがために、万物の霊と一体である」とか、或いは「六根清浄の理、眼根清浄、耳根清浄、鼻根清浄、舌根清浄、身根清浄、意根清浄」とか言われているが、一体これはどういう道理か。

実際にこういう境地に到ろうと思つたならば、常に心地の工夫をしていなければならない。もし十分にこの六根清浄になることが出来れば、神道の人は天照大神の本志にかなひ、儒道の人は孔子の本懐に相應し、佛道の人は釋尊の直指^{じきし}に通達することができる。

工夫信心といつても、自分の職業や世渡りの働きをやめて、特別の信心をされた方がよいというものではなく、渡世のうちから信心をし、信心のうちから渡世を営まれよ、というのである。

人間であるから鳥や畜類のように裸でいるわけにもいかないし、その人に相應した衣類や住居^{すまい}や金銭もなくて済ますわけにはいくまい。このように内外ともに憂いのない状態で心地の工夫に励むときは、まことに人間に生まれた甲斐^{かい}があるというもので、神佛や聖賢の教^{そむ}えに背くことのない人である。

八、日蓮宗の信士に示すこと

或る人が来参して、師に申し上げた。私の先祖は代々日蓮宗ですので、その宗派の道の人から妙観ということを聞いて熱心に観念に努めました。が、まだこれといった靈験はありません。むしろ題目（南無妙法蓮華經）を唱える方が利益があるのではないのでしょうか、どうか慈悲を垂れてお示し下さい。

師は言われた。日蓮宗というのは、もとは天台宗から分かれて、法華經のみを所依の經典とする、大乘の最たる宗門である。法華經の教えの通り信心のあるときは、釋尊の本懷にかなひ、大乘の妙典の極処に通達する。

妙法蓮華というのは、他でもない、人々の一心の名前である。本来この一心には、名もなく字もなく、過去久遠劫より色の変ることもなく、明々歴々として、今も昔も佛と衆生との隔てはないのであるが、凡夫はそれを知らずに自分に迷ひ、自己の外に佛を求め法を求めるので、釋尊は敢えてこの一心に妙法と名を付け、蓮華という名を付けて法華經を説かれたのである。また敢えて阿彌陀と名付けて阿彌陀經を説かれたのである。

名字を認めて実体としてはならない。ただその本体を知らねばならない。その本体は全く他物から得たものでも、遠方に有るものでもない。ただ今手を動かし足を動かす当体、これは何ものか。これこそ人々具足の妙法であり、蓮華であり、一乗の法である。これ以外のところに佛を求め法を修する人を、釋尊は迷いの凡夫と叱責され、或いは長者の窮子に喩えたりされている。

法華經の教えの通りによくよく信心が有る時は、どの人もみな妙法の丸出しの全体に到ることが出来る。妙法の全体によく到るときは、禪宗の全体に到り、淨土教の極意に到り、天台宗や真言宗、そればかりか諸道の全体に一挙に到ることが、手のひらを指すよりもた易くなる。

法華經の提婆品には、「八歳の龍女が深い禪定に入って諸法を了脱した」とあるが、これはまた一体どういう道理か。「深い禪定に入って諸法を了脱する」とは、深い妙觀をして一心を悟ったということである。禪定といい、妙觀といい、坐禪といい、觀法といい、みな同様に工夫の別名である。

深い禪定に入って自心を了達することがなければ、こういうことも会得し難いことである。八歳の龍女すら悟りを開いたというのに、人に出来ないわけがない。

さまざまな經典や宗派があり、それぞれにさまざまなことが説かれてはいるが、その根源を尋ねれば、この自己の一心より外に法もなく佛もない。この故に、法華經の中に、「十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三」と説かれているのである。

十方佛土中ということは、詳細に論ずれば言葉が長くなるので、今は略して説くことにしよう。十方佛土中とは、天竺（インド）、大唐（中国）は言つに及ばず、無量の数の島々や天外地外までもひつくるめて言う言葉である。

唯一乗法とは、ただ一乗の法のみが有るということであり、無二亦無三とは、二もなくまた三もないということである。十方佛土中の世界はすでに述べたように際限のない広さであるとはいえ、法というものはただ一つのみで有って、ほかに二、三はないというのである。

法というのは心法である。心法とは人々の一心の法である。この心法は、昔の釋尊にも今の凡夫にも、一様に備わっており、何らの相違がない。このひとつの心法が過去七佛（釋尊以前の佛）にも、達磨大師にも、日蓮上人にも、法然上人にも、禪宗にも真言宗にも、草木や牛馬に到るまで、一様に行き渡っている。そのために全てに行き渡つたこの心法を悟れば、衆生は即ち佛であるというのである。よくこの道理をわきまえて、深く信心されるがよい。

儒教でも、天地の間に色形のあるものには、性というものが一々具わっていることを説いている。医道にも、三才（天・地・人、宇宙の万物）は一気なりと言っている。このことから分かるのは、聖賢や佛祖はいずれもその根源は同じであり、別のことではないことである。

信心工夫のことと妙觀とは元来同一ではあるが、大疑を起す仕方やその外の微細の修鍊に関しては、拔隊法語にことごとく述べられている。詳しいことはそれを見られたい。

日蓮宗のかの信士は再び尋ねて言った。古えいにしへの人は上根であつたので一心を悟りやすかったが、我々のような末世の凡夫は悟りが難しいと聞き及んでおりますが、この点に關してどう思われますか。

師は言われた。この一心を悟る工夫修行は、ただ末世の凡夫、迷いの凡夫のみがなすべき工夫修行なのである。諸経は凡夫のため末世のためばかりに説かれている。この道理を、釋尊はご自身で直接諸経の中で説かれており、諸経は佛のために説かれたものではないのである。

佛はすでに悟つて成佛しているのであるから、信心修行の必要はないはずである。もし末世の凡夫は悟ることが難しいというのであれば、法華經をはじめ諸経は皆いつわりということになる。諸経がもしいつわりでないならば、(末世の凡夫は悟り難しいというのは)一切諸経をことごとく押し破ることになり、法をそし謗るという罪は量りはか知れないことになる。

上代でも、火は熱く、末世といつても、水は冷たい。上代でも、天は高く、末世といつても、日月は地上に落ちることはない。このことから知られるのは、上代と末代とは何らの違いがないということである。

ただ大乘の教えの通り善知識(明眼の師匠)の指示に少しも背くことなく、深く工夫をするときは、百人が百人ながら悟ることがすみやかとなる。直に一心を指して佛とも法とも言つのである、どうして難しいことがあるうか。

法華經には、「かの久遠くおんを思えば、ちよつと現在と変りはない」と述べられているが、このことから上代と末世の隔てがないということを知るべきである。上代と末世ということは、佛が在世された時代からの遠近をもつて、仮りに上代と末世と言うのであるが、この一心佛性においては、正法、像法、末世などという沙汰さたは毛頭ないはずである。この故に、古人は、「悟っていない人に理解できるお経の文句は一句も有り得ない」と言っている。このことをよくよく思ふべきである。

九、諸人に三大事あることを示すこと

師が或る日示して言われた。人々が誰しも具そなえている三つの大事がある。いわゆる生の大事と死の大事と一大事因縁の大事である。この三つの大事は、どの人も知っていないなくてはならない。どれほど賢く、利発な人であっても、見ないこと聞かないことは出来るものではない。どうか皆さん方のひとりひとりが眠けを覚まして、心を静かに落ちつけてしっかりと聞いて頂きたい。

生の大事とは、生というのは生まれると読むが、人々は今日このように出生したといつても、生まれないう以前のことは、知恵分別をもつてしても知り難く、学識や学才をもつてしても明白になり難い。

自分のこの存在が生まれ出る以前に、一体どこに有つてどういう形をしていたのやら、釋尊の出世の當時は、どこにいたのやら、七佛のときには、どこにいたのやら、さてさて何をたよ使ひとして知るといふことも出来ず、学問や分別の解決出来ぬ問題である。これを生の大事という。

次に死の大事とは、人々がこのように出生して、百年も千年も生き永らえるように思ってはいても、この身の仮りではないことは、夢のようであり空花^{くうけ}のようである。富貴や老少に関わらず、今日この身が有っても、明日はない。ちょうど旅人が行つては休息し、休息しては行くように、しばらくの間も留まるものはない。

昔、名をはせた諸大將が、さまざまな場所に城を造り、百物が盛んであつた。朱色の樓閣や翠色^{みどり}の御殿などは豪華絢爛^{けんらん}の限りを尽くし、勇士や剛兵は金で飾つた馬に乗つて勢ぞろいし、銀の鞍^{くら}を輝かし、博學秀才の者は、榮達を競つて名が知られるのを願ひ求めた。

朱色の樓閣や翠色の御殿も今はない。勇士や剛兵も今は白骨となり、その白骨もついに土となつてしまつた。この世界のはかないことは、全てのこと全ての人がこの通りである。

金剛經には、「一切有為の法は、夢のごとく幻のごとく、泡^{あわ}や影のごとく、露のごとく、電^{いなずま}のごとくである。まさにそのように觀なければならぬ」と説かれてゐるほどで、人々はこの世のはかないことは喻^{たと}えようもないために、古人（莊子）も、蝸牛^{かきゅう}の角^{つの}の上^のにいて、一体何を争い、何を論じようとするのか、と言われた。蝸牛とはかたつむりのことである。人々がこの世界に住居^{すまい}しているのは、蝸牛の少し角を出した上に住んでいるのに喻^{たと}えたのである。このようにかりそめの所につかま居住しているだけであるのに、一体何を争い、何を論じようというのか、というのである。

さてまた、このようにはかないもので、天地の間で死なない人は誰一人としてない。死んでから後、どの場所にどのようになって存することになるのかということは、学問や学才をもつてしても如何ともし難い問題である。これを死の大事というのである。

次に、一大事因縁の大事とは、すでに述べたように、この身ははかなく、幻のように夢のように人々は白骨となり、白骨もついには土となってしまうと見受けられる中に、一つの頼もしいことがある。

どの人にもそれぞれ具足して、どれほど時が経つても、生滅にも関わらず、夢幻にも関わらず、火に入っても焼けず、水に入っても溺れず、減りもせず増えもしない一心佛性の一大事が、貴賤男女の区別なく、草木瓦石に到るまで、全てに行き渡っている。

この人々が具足している一心佛性は、まだ天地も開けない先（宇宙創成以前）から今に到るまで、色を変えることもなく、未来永劫にわたり宇宙の外までも行き及んで、明々歴々として昼夜の差別もなく、十方大千世界に堂々と顕れている。

この一心佛性は、昔の釋尊や達磨にも、今の凡夫衆生にも、濃淡の別なく一様に具わっている。昔の佛性は、直に今の佛性である。今の人々の一心は、直に昔の釋尊や諸佛に具わった一心である。法に二法なく、佛に二佛なしとはこのことであり、これを一大事因縁の大事と言っているのである。

人々のこの一心には本来名はないのだが、しいて名を付けて、衆生に説法するとき、一大事因縁と名付け、心法と名付け、佛と名付け、禅と名付け、真如法界しんじよほっかいと名付け、円覚と名付けて円覚經を説き、妙法と名付けて法華經を説かれたのである。

このほか一心の異名は限りがなくて数え尽くすことが出来ないほどである。儒道では明德と名付け、或いは天理や至善や天命と名付けている。神道では神と名付け、靈みたまや心と名付けている。そのほか、書物により場所によつて名前の相違はあるが、ただ一つのものである。世間では往々おつあつにして文字が違い、名目が違い、読み声が違えば、その事物もまた異なるように思うが、これは大きな誤りである。

常日頃工夫修行してよくこの一心を明らかにして、天地と我と一体の境地に到つたのを、成佛と名付け、出世の聖人といい、大菩薩といい、極樂往生といい、娑婆即寂光土といい、智識といい、如来といい、道人といい、法界三昧というのである。

そのほか悟りの名も枚挙にいとまがないほどで、老僧はただそのうちのいくつかを挙げているに過ぎない。如来といい、菩薩といい、梵語（サンスクリット）であり、特別のものと思つてはならない。ただ悟つた人の名に過ぎない。どの宗も、どの道も、この一心を根本極意として、種々さまざまの教えがあるが、それはただこの一心を明らめさせるための階梯かいていである。

古人は言っている。書物に著わすのも、ただ道に入らせんがためであり、文字にするのも、ただ道に入らせんがためである、と。名号や題目を唱えたり、誦経や写経したりする教化の仕方は、この一心佛性の道理を明師より聞く縁もなく、或いはたまたま聞くことはできても、その何たるかを理解できない人のために設けたもので、有り難い因縁である。

上述のようにまず名号や写経などの方便を通して、ようやく功德も積み、心もおだやかになり、因縁時節によつて直指の本筋に向かうならば、諸佛の大誓願に背くことのない人である。もしまた真偽や邪正を知らないで用いるならば、諸佛の大悲に漏れる人である。

佛道の本筋は、直に一心を明らかにして、生きながら成佛を遂げることである。天台宗には止観があり、真言宗に阿字観があり、浄土教には一法句や己心の弥陀や唯心の浄土があり、法華経には禅定のことの詳細である。

儒道には静坐工夫があり、神道に静心がある。そのほか医学や算術書や歌道や剣術に到るまで、根元の工夫をことごとく具えている。書物や宗派によつて、呼び名は相違するとはいえ、ひとえに自性を明らかにする修行の名である。文字や呼び名に拘泥して、本分を失ってはならない。

十、悟りに賢愚のないことを示すこと

或る人が来参して問うて言った。自性を明らかにすることは、賢い人は教えられなくても明らかにできるでしょうが、私どものような愚鈍なものは、極めて難しいと思います。

師は言われた。自心を悟ることは、賢愚にも関わりなく、学無学にも関わりない。ただ信ずることが深いときは、賢愚ともに悟ることがすみやかとなる。

昔の諸葛孔明^{しよかつしやうめい}は、その才は三国に雄飛し、その名は万世に伝えられているが、ただやすやすと軍を出し、はかりごとをもって人を殺害することだけを知って、この一心に不生不滅の大事があることを知らないのは、とても賢明というわけにはいかない。このことから孔明のことが知れるであろう。賢い人といっても、知らないことは成就し難いのである。

そのほか中国の歴代王朝に仕えた人達は、いずれも聰明で才に秀れてはいたが、自己の明德を明らかにして儒術に専念した人は稀であり、それはただ儒道の明師に出会うことがなかったが故の誤りである。

十一、来参の人に示すこと

或る人が来参して師に問いを呈して言った。この生涯で嘘もつかず、殺生もせず、理に反したこともせず、盗み心もなければ、それは来生を願ったり、工夫信心したりするにも及ばないことでしょいか。

師が言われた。世間では悪業をしない人はあっても、悪業を免れた人は至って少ない。この故に、悟った上での善悪は、善悪共に善であり、迷いの上の善悪は、善悪共に悪である、という言葉があるのである。貴方のような見方は、細麤浅深の相違はあるが、無事甲裡の見（何もしいないことに尻を据えろという見識）というのに属していて、これまた一つの大病である。それはその道の達人に聞かないための誤りである。

昔、子路がまだ孔子にお目にかかっていなかったとき、彼は生れつき仁の心が厚くて、郷里でも抜きん出ていた。ある人が子路に対して、師について学ぶべきだと言つと、子路は言つた。自分はどうして師について学ぶ必要があるうか、不義でもない、不仁でもないのに。

ある人がこれを孔子に告げると、孔子は言われた。子路のような人は、ちょうど山中にはえているまっすぐな竹のようなもので、ただ山中の美竹であるに過ぎず、人に役立つこともないままである。もし矢師にこの竹をまかせば、矢じりや羽をつけて空中高く飛ぶことが可能となり、国家有用のものとなるであろう。子路のような人はちょうどそのような山中の美竹である。

子路は孔子のこの言葉を聞いて、驚いて孔子に学んだと聞いている。老僧ははっきりとは覚えていないので、おおよそのことを語るに過ぎない。子路ですらその通りである。孔子聖人のお言葉をよくよくうけたまわらねばならない。子路のように貴方もすぐに志を改めて、真実の道に入るべきである。

十二、工夫疑団を示すこと

或る人がやって来て工夫について尋ねた。師は示して言われた。工夫は音声を聞く主を疑うべきである。これは昔、観音菩薩がなされた聴法底（法を聴くもの自身）の信心であることは、首楞嚴經（しりょうごんぎょう）に見えている。

ただ今、一切の音声を聞くことは、確かに聞く主がいるがためである。耳で音声を聞くとはいっても、耳の穴が聞く主ではなく、耳はただ音声を聞く道具に過ぎず、耳より他に音声を聞く主が確かにいるのである。もし耳の穴が音声を聞く主ならば、死人も音声を聞くはずである。死人にも耳はあるが、音声を聞くことはできない。このことから知られるのは、耳はただ音声を聞く道具に過ぎず、耳より他に聞く主がいるということである。

常日頃、音声が聞える時も聞えない時も、聞く主何ものぞと押しかえし押しもどして、深く疑うべきである。口で唱えることはないが、色々の分別妄想が起つても少しも気にかけずに、ただ深く疑うべきである。満身の力を尽し、前もって成果をあてにせず、悟ろうとも悟るまいとも思わず、幼児のような純粋な気持ちで、いよいよ深く疑うべきである。

また種々の妄想が少しでも有るときは、これは工夫の疑いが弱いためであると心得て、いよいよ深く疑うべきである。どれほど深く疑っても、聞く主は知れるものではない。その知れない所について、この時いよいよ深く追究すべきである。

抜隊法語には、「料簡さらに絶え果ててどうすることも出来ない。これがよい工夫である」とある。前後左右をかえりみず、一心不乱で、ここにわが身のあることを覚えないうほど、大死人（一切の意識分別を忘じた境涯）のようになって深く疑うべきである。

段々深く工夫して、茫々（ぼうぼう）（わけの分からぬさま）となることがある。この時又聞く主何ものぞと大疑を起し、通身に汗を出して、大死人のようにいよいよ深く疑うべきである。のちのちには大死人ということも知らず、大疑工夫ということも覚えず、通身が大疑団となつてゐる状態から、大夢がさめたように、死に果てた物が急に活き返つたかのように、忽然（こつぜん）として大悟という所に超出する。

このように大疑情を起して工夫をすれば、悟道見性に到達するのに時間や歳月がかかるはずがない。いねむり工夫やなぐさみ半分の工夫をして、分別知解（ぶんべつちげ）をそのままにして見性を求めれば、あたかも木の上に魚を求めるようなものである。毛頭でも自分の意識分別を加えて見性を求めれば、東に行くべき人が西に赴く（おもむ）ようなことになる。

工夫がもし大疑情を欠く時は、坐禅して百年千年を経ても、悟了の日はないであろう。もし又、すでに述べたように、大疑情を起して工夫をすれば、一夜でも悟ることが出来、一、二時間でも悟ることが出来るであろう。古人には、十歳にして悟ったり、十三、十四、乃至十五、十六歳の女子ですら悟った例が少なくない。まして血氣雄壮な人ではなおさらのことである。

諸方で参禅学道している諸大徳が、純心で貞実な志をもって佛道を修行していても、往々にして龍頭蛇尾の尻すばみに終ってしまうのは、この工夫をどの程度すれば悟れるか、という限度を聞いたことがないためである。この工夫にも確かに限りはある。その限りとは、大疑の一念が底に徹するほど工夫をすれば、百人は百人ながら、千人は千人ながら大悟するのである。

師は^{ほす}松子を立てて言われた。どうだ体得できたかな。元来、大道の工夫は（一種の人間的是からいである）修行の力を借用するには及ばぬ。もしこれでも体得出来なければ、自己自身の心底に向かって大工夫をなすべきである。

十三、悟証の上に大事あることを示すこと

一人の僧が来参して、師に呈示して言った。私はすでに自己の問題を究明して、求めることもなく、捨てることもなく、未来永劫までただ一日と心得て、茶に逢えば茶を喫し、飯に逢えば飯を喫するという風に、自己の妙用自在を得て、安心して心のおだやかなことは、言葉に尽せないほどです。和尚様、どうか聖胎長養（悟後の修行）の工夫の仕方をご教示下さい。

師は言われた。今日佛法は中国でも日本や朝鮮でも地に墮ちているが、そついう時節にそれほどの力量をつけられたことは、老僧はなはだ感に堪えない。しかしその上にまたまた一大事がある。なお更に精彩をつけ、徹底するまで修鍊しなければならぬ。

佛法は大海のようなものである。入るに従つて増々深くなる。自分は悟つたとか会得したという念が、米一粒の百分の一有つても、それはまだ実悟ではない。古人が容易に人を許可しないのは、このためである。

もし真実に悟つたならば、自分が悟つたとか証したとかいう心の念は、底を尽くして一点たりとも無いものである。まして佛法に関わる事柄に対する時は佛法を会得したように見えるが、ややもすれば人前にさらけ出せないような見苦しい思いが浮かび起る、という場合はなおさらである。自問自答されるがよい。

僧が言った。私は悟了してすでに分明ぶんめいです。夢幻空華くわんくわ（畢竟空ひつぎやうくう）、どうして破迹はしやく（執着の打破）の必要が有りましょうか。

師は言われた。大徳よ、本当にそういう境涯ならば、古人の語を見るべきである。或る僧が、「祖意と教意とは同じか別か」と問うと、ある禅師は答えて「金烏う（日）が東に上れば人のほは皆貴たうとぶ、玉兔（月）が西に沈むと佛祖は迷う」と言われたが、この真意をどう思われるか。

僧が或る所作しよさをしようとすると、師は言われた。所作で示さず、喝をも用いず、すみやかに答えよ、すみやかに答えよ。僧がためらうと師は言われた。ためらうてぐずぐずするようなことでは六十棒をくらわず、すみやかに答えよ、すみやかに答えよ。僧は礼拝らいはいした。

師は言われた。大徳よ、すでに述べられた通りの境涯であるならば、この程度の祖師の語は何の難しいこともないはずである。もし真実に悟ったならば、目前の茶碗を見て、分別料簡りふつけんを加えずにただちに茶碗と言うように、扇子を見てただちに扇子と言うように、一切の佛祖の言葉が一挙ひときりに分明ぶんめいとなるものである。

大徳よ、まだ本当には悟っていないのに悟ったと思うのは、大きな誤りである。あべこべに悟後の長養の工夫を老僧に聞こうとする。もし悟了したのが真実であるならば、長養の工夫をどうして他人に聞く必要があるのか。自分で知り得ることではないか。

大徳よ、あなたは何かから何まで誤っている。今日からは歩を退けて己事究明に励み、これまで担いでいた見識を放下（ほうげ）（放ち捨て）して、大疑団を起して大工夫をなすべきである。たとえ幾度となく会得したとしても、それはみな心の分別知であって、実悟ではない。実悟というのは迷いと悟りという二元対立を超越しており、生滅や苦楽という二元対立を根本的に絶している。

世尊は円覚經に説き示されている。「その心に究極的な了知を得て如来清浄の涅槃を証しても、それはみな自我の相に過ぎない。」このように如来の微細な真実のお言葉は、ただただ人をして真正の見解を体得せんがための大慈大悲なのである。

或いは菩薩に十地の階級が有って、等妙の二覺を超えて佛地に到り、又更に佛地をもはるかに乗り越えて限りなき所に到ることを説かれているのも、ただ悟りにはことごとく浅深や高下があるためである。臨済録の中にも、ことごとく修し尽すことについて述べておられるので、「一覽になるがよい。

老僧は幼年の頃から禅定三昧で、ことごとく修し尽し、その後諸方に遊歴してあらゆる諸大徳（名僧がた）にまみえ、辛苦を喫し尽して、今日このようになったのである。この老衰ぶりであるから二度と相見することも期し難いので、たとえ仮初の氣持ちでやって来る者でも、真実求道の念に燃えてやって来る者でも、老僧はただ真実をもつて垂語するのである。

諸方の参禅学道の諸大徳は、昔も今も小見（小さな見識や体験）をもって十分であると自負し、古則公案をちよつと数えただけで、自分は大悟したと思ひこむ。或いは空寂の心境を悟りと思ひ、皆小見解に尻を据えて、十全であるかのように思つて工夫をやめてしまふ。このような訳で大器量の人は天下に稀である。

古人（黄檗希運禅師）は言われた、「大唐国の裡に真の禅の師があらぬことを知っているか。禅が無いとは言わないが、ただ真の師がいないのだ」と。或いはこうも言つ、「千里を駆ける名馬は世に多いが、名馬に仕立てる伯楽がいないことを慨く」と。

老僧は昔、十二歳の時、手習い（書道）の友であつた少年が、同い年で驚風（脳膜炎）の病気で、わずかに一夜にして急死した。自分はこのことを目撃して以来、寢食も安んじて出来ずに、一室に閉じこもること六、七日、その時自ら思つたのは、佛道には成佛ということがある、是非ともこれを学ばねばならぬ、ということであつた。

そのころ出羽の国（東北地方）の高寺に格外和尚があられたので、その弟子となつて剃髪、出家した。その後、他の僧から抜隊得勝禅師の法語を入手して、その法語に示す通り微塵も違ふことなく工夫をした。

抜隊法語に言つには、「ただ幾度も悟られる悟り（所得底）を打ち捨てて、根本の一心に立ち歸つて工夫せねばならぬ」と。これを読んで自ら決意したのは、たとえ幾度でも悟つたところを放ち捨てて深く工夫をすれば、やがて必ず大悟大徹のところに到るに相違ない、ということである。

この決意を確信して、それからいよいよ工夫に没頭した。その後、数えきれない位の悟処があつたが、ついに工夫をゆるめることはなく、或いは山居し、或いは店居して、歲月や四季の変遷を忘却して坐り抜いた。

その後、越後の国（新潟地方）の蒲原郡で亀庵和尚（中峯下第十四世）にお目にかかった。亀庵和尚は老僧を一見してことごとく印可付法した。このように印可付法して頂いたとはいえ、なお更に長養精修して、勢いついた奔馬に鞭うつが如き有りさまであり、氷が水から生じて水よりも冷やかである思ひであつた。

世尊は一大事因縁と説かれ、無上の大道と説かれている。ゆめゆめ容易の觀をなしてはならない。もしこの一心の佛性に、ここまでが悟りの分際で、これより他に悟りは無いと言うのであれば、何も無上の大道とは名付けまい。無上とは上が無いという意味である。世間の諸道や諸芸のうち、これに並ぶものが無く、これを超えるものもなく、また到達する所も窮りが無いが故に、無上の大道と名づけたのである。

公案はいずれの公案にせよ、ただ一則の公案をしつかりと深く疑つべきである。眞実に一則の公案を悟明すれば、一千七百則といわれる公案を一時に見徹することが出来る。「佛法の一句は明らかに百億劫の修行に勝る」（『証道歌』）と言つではないか。

公案のことであるが、この公案を工夫して、また別の公案に移ったり、聞く主の公案をやめて、趙州の無字に移ったりなどすれば、心の作用が二股またに分かれて、大疑団が起らないものである。ただ初めから末の末まで一則の公案のみを深く疑うべきである。こう言うと、愚かな人は老僧を笑うであろうが、智慧のある人は老僧の真意をよく了解することである。

佛道の導師となることはどうでもよい等閑なあざりのことではない。わずかでも違えたがれば、天地の隔りへだたが出来てしまう。愚かで道理に暗い凡夫を導いて成佛の実地に到らせることは、毛すじほども間違えれば、一人の盲人が大勢の盲人を引いて燃えさかる火の穴に入るような危険なこととなる。師匠というのは針のようであると言われる。それは針に毛すじほども曲りがあれば、あとにつく糸も曲るからである。

そもそも佛道の師というのは、自分が生まれない以前、自分の本体がどういう所にどのようなにして有ったか、また死んで後、自分のこの本体はどういう所にどのようなにして有るのか、釋尊が世に出られた時は、自分の本体はどこに有り、釋尊は現在どこにおられるのか。その外、過去七佛を初めとして、達磨大師や臨濟禪師、その他の祖師菩薩、或いは孔子、或いは天照大神、或いは文武の無数の諸賢人、その外、父母兄弟、親族朋友に至るまで、生まれる前と死んで後、どういう所でどのようなして存在しているかを、手の中の物を見るように分明ぶんみょうに見徹しなければ、真実の佛道の師ではないし、そのようでなければ生死自在を得た大解脱の人とは言わない。

このように老僧が幼年初心のことも何でも語るのも、ただひとえに真実の修行をしてもらいたいがためである。大徳よ、ぬかりなく綿々密々に工夫をなすべきである。

十四、和光行脚の時に好学の者に逢うことを示すこと

師は或る日修行者達に語つて言われた。昔、老僧が和光行脚（悟つた心境を実地に鍛錬するための諸方遍歴）の時に、越後の国（新潟地方）に行つた際、或る領主の家中に一千石を拝領している武士がいたが、彼は幼年の頃から学問を好み、文筆の才もまた卓越していた。近隣の寺々の和尚や長老方でも、彼には太刀打ち出来ない程で有つた。従つて四書五経や朱子の註釈を抛りどころとして佛法を否定し去り、ないがしろにして、僧侶と見ればまるで奴才（こいつ）のように輕蔑したのである。

その武士の両親はこれから先の因果応報を慎（おそ）れて、老僧に忠告してくれるように懇願した。そこで老僧は彼に面と向かつてこう言つたのである。佛法を否定し憎まれるとお聞きしたが、佛法の本体や佛法の根源をよくよく見定めた上で、本当に悪いということを知り尽して、そのように佛法を譏（そ）り憎まれるのか。佛法だけではない、世間一切のことも、よくその根源を尽さなければ、確かに善いとか確かに悪いとか断言し難いものだが、貴方の場合はどうか。

武士が答えて言つた。さてさて何ときびしい難問か。これほど綿密な質問を受けたのは、初めてのことです。私はただ佛法が、地獄が有り鬼がいると説いて、すべて方便でつちあげばかりで、元来何も無いことと思ひ、これによつて佛法を譏つたのです。

老僧は言った。さてさて学者だと聞くのに、それらしからぬことだ。この程度のことを難問だなどと言
い、或いは佛法はただ方便でうちあげばかりで、元来何も無いことと思われたのは、恥^はずべきことである。
佛法とは何ものを名付けて佛法というかを知ることなく、かえって佛法を譏^{そし}り憎まれるのは、誤りと言
うか、愚かと言うか、言語道断^{ごんごうだたん}のことである。

何ものを名付けて地獄と言ひ、何ものを名付けて鬼と言ひ、何ものを名付けて佛法と言ひかを知られな
いならば、何ものを名付けて儒と言ひ、何ものを呼んで明徳と言ひかということも、まだ知ってはおられ
まい。そもそも佛法とか佛道と呼んで、昔からその呼び名が世間に流布し、末代まで鳴り響いているのは、
佛法という呼び名に相応した本体が確かに有るが故である。本体が確かに有るが故に、佛法という名を付
けたのである。

ただ佛法ばかりでなく、世間の一切のものは、本体が無いものにはその名も付け難いものである。書籍
は確かに本体が有るが故に、書籍という名を付けたのであり、硯^{すずり}は確かに本体が有るが故に、硯という名
を付けたのである。鎧^{よろい}と名付け、甲^{かぶと}と名付けるのも、又々同様で、一切の草木や禽獸^{きんじゅう}に到るまで、確かに
それぞれ本体が有る故に、それぞれその名を具^{そな}えているのである。

風というものが有る。目にも見えず、手に取ることも出来ないが、枯木を吹き倒し人家をひっくり返し
て、確かに音がする。そこで風という名を付けたのである。影というものが有る。鏡に写る影、人影、そ
の他の一切の影は、手に取ることも出来ないの、無いと言ってもよい位であるが、確かに色があるので、
影という名を付けたのである。

世間の一切のものは、音や色や行の相も無く、すべて形体の無いものには、その名を付けるのが難しい。ただ何も無い所を、空くうという以外は名付け難い。佛法がもし（貴方の言うように）何も無いものであれば、空と言うべきである。ところが古来から佛法や佛道と呼んで経論で言及したり、世間の人が口の端にのせているのであるから、どうして佛法に本体が無い訳わけが有るうか。

武士は低頭して言った。私は大いに迷っておりまして。どうか佛法の真実の旨をうかがいとう存じます。こと細かにお示し下さい。

老僧は言った。佛法や佛道と云うことは別の事ではない。ただ今手を動かし、口を開いたりすることは、一体どういう道理か。これこそ人々具足の佛法の妙用に他ならない。この一心の名を佛法と名付け、佛道と名付けたのである。これを佛道は元来何も無いことだと言えようか。

もし元来何も無いことならば、即令、手を動かし足を働はたらかす底は、何ものであるか。佛法とは自分の一心の名であるということを知らないで、却つて佛法を譏そしり憎むのは、取りも直さず自分の一心を譏り憎むことになる。これは愚か極きりないことではないか。文盲もんもつの極みではないか。

貴方が学んでいる書籍は、一体どういう書籍か。天地の間かんのあらゆる書籍は、儒書か、神書か、佛書か、道書か、歌書か、軍書か、医書か、いずれにしても皆、身と心の二つを説いている。結局何を学問しているのか。身と心とを離れて、外ほかに書籍が有ると言えば、邪書であり、外道の書である。

武士は言った。私は大いに誤っております。お詫び申し上げます。今日初めてこのような妙理を拝聴致しました。これからは今までの考えを改め、出来ますれば老師のご教示をお受けしたい、と言って礼拝（らいはい）をすること再三であった。

老僧はこの武士の家に滞留すること三十日余りであったが、彼は後に大工夫者となったのである。

十五、大疑工夫を示すこと

師は或るとき修行者達に示して言われた。工夫して疑团（疑いの固まり）になるのは、百万騎の大敵にただ一人で立ち向かうようではなければならない。聞く主（ぬし）を疑う人は、聞く主何ものぞと大疑情を起して深く工夫し、趙州の無字を工夫する場合も、また同様である。

どこまでも深く疑っている、その中（うち）から色々の分別や妄想が起るならば、これは妄想の大敵に味方の工夫の城郭（じやうかく）を奪い取られると心得て、いよいよ深く疑うべきである。大疑の一念を宝剑として、妄想の大敵がちよつとでも顔を見せたならば、直（ただ）ちに聞く主何ものぞと斬（き）って捨てねばならない。この通りに行住坐臥ぬかりなく修するならば、安心立命の太平の日が必ずや到来するはずである。

老僧がこのように色々と手を変え品を変えて垂語するのは、何とか深く心性を悟ってもらいたいためばかりの言であるから、記憶しておいてはいけない。

十六、淨心妄心を示すこと

師は或る日に示して言われた。どの人にも具そなわっている二種の心があるが、工夫修行をする人は必ず聞いておくべきである。どの人にも二種の心があることを智識からよくよく聞かなければ、ややもすれば工夫に退屈してしまい、生死しよじの大事を解決することが出来なくなるものである。

それ故に如来を始めとして（祖師方は）、千里を遠いと思わずに善知識を尋ねよと説かれた。百里や二百里ですら法を求めて行脚あんぎゃすることは、真実求法くほうの心が無くては出来るものではない。まして千里を遠いと思わないことは言うまでもない。誠に深い宗旨が有るのである。

二種の心というのは、いわゆる淨心と妄心である。妄心というのは、分別妄想の心の念である。淨心というのは、分別妄想の根源であり、これが即ち淨心佛性である。この淨心と妄心は、元来同一であつて又二つである。例えば燈ともと光との關係に似ている。燈の本体が有るが故に自おのずから光が有り、淨心佛性の本体が有るが故に、分別妄想の妄心が有る。淨心は本体であり、妄心は用ゆう（はたらき）である。

往々にして一般の人は、妄想分別をとらえて、これが自分の本当の一心であると思っている。そのため、工夫する人は、ややもすればこのような悪念や妄念の多い浅ましい一心では、佛や菩薩などのように悟ることは出来ないと思つてしまう。そこで工夫にも退屈してしまい、自分は凡夫であると言つて、惜しいことに中途で一大事を明らかにする修行をやめてしまうのである。

或いは分別妄想の心をとらえて、これが自分の本心であると思うため、人が十人いれば、一心も十色といろがあると、百人いれば、一心もまた百色有るように思うのは、大きな誤りである。淨心佛性は天地もまだ開けない以前から今に到るまで、色を変えることなく、昔の釋尊や諸佛にも、今の凡夫の衆生にも、草木や禽獸きんじゅうにも、濃淡の差異なく、例外なく兼ね備わっている。般若心經に、「生ぜず滅せず、増さず減せず」と説かれているのは、この淨心佛性のことである。工夫修行は妄心の分別の心をもって工夫疑團に専念して、淨心佛性を明らかに悟ることである。よくよくこのことを心得なければならぬ。

その喩えに言う。まず一本のローソクに火をともし、その後にローソク十本二十本を使ってその火を移すというやり方で、百本二百本更には三千本一万本と、初めの一本のローソクの火を分けて移して、最後の一万本目の火となっても、最初のローソクの火と少しも濃いうすいの相違はなく、最初の火は大変熱く、最後の一万本目の火は少し熱いという相違はないが、自性を悟ることも又これと同様である、と釋尊は説かれたが、何と大悲心ではないか。

このことから知れるのは、実悟する時は、釋尊の悟りと現在（の悟り）とが全く相違が無いことである。すべてのお経は經義と言つて義（条理）をもつて述べられている。お経の中には色々な奇怪なことが多く説かれてはいるが、結局はみな一心佛性のことだけを、あれになぞらえこれになぞらえてと説かれているのである。看經の眼（お経の言葉の真意を看て取る眼力）がなければ、迷うことが多いであらう。

その故に、文章通りに意味を受け取れば三世の諸佛の敵である、と呵責（いぢやく）されている。如来が娑婆（しやば）往来八千度されたというのも、およその数を言われただけである。どうして八千度くらいに限られようか。或いは、世間で觀音の再来とか文殊の化身などと言ったりするが、天地の一切の人や物で再来でないものはひとつもない。老僧がこのように言つても、増々疑心が増すであらう。実際に実悟見性して自ら知るべきである。元来大道というのは修行の力に左右されるものではないのである。

十八、拔隊法語の最初の行を示すこと

師が或る日に示して言われた。拔隊法語の最初の行には「輪廻りんねの苦しみを免れようと思うならば、直に成佛の道を知らねばならない。成佛の道とは、自心を悟ることである、云々」とある。この一行は成佛の近道、如来の四十九年間の説法の要かなめ、最上乘の直説じきせつである。三世の諸佛の応現（衆生済度のために色々と姿を変えて出現すること）も、これのためであり、数限りない衆生が願ひ欲するもの、これのためである。

輪廻りんねとは比喩ひゆ的な言葉で、車の輪が廻めぐることである。何を輪廻の苦しみと言いかといえ、世間の貴賤貧福、老若男女の人々が、通常四六時中、この心ひとつが善きにつけても悪あしきにつけても、車の輪の廻るように廻り苦むことである。資産の多い人は多いことについてこの心が廻り苦しみ、資産の少ない人は少ないことについて廻り苦しみ、老人は年の寄ったことについて廻り苦しみ、若い人は若いことについて廻り苦しみ、女の人は女人の道についてこの心が廻り苦しみ、商人は売買について廻り苦しみ、百姓は耕作について廻り苦しみ、高位の者は高位であることについてこの心が廻り苦しみ、下賤げせんの者は下賤であることについて廻り苦むのである。

このことが終れば別のことが起り、喜びが去れば悲しみが来て、一年一月のうちに一日たりとも安穩あんのんな日は無く、この心ひとつが四方八方へくるりくるりと車の輪が廻るように、万事につけて廻り苦むのである。この廻り苦しむ心を指して、法華經には、「三界は安心できる所ではない。ちょうど火宅のようなものである」と説かれているのである。

この廻り苦しむ心をそのまま来世に持って行くならば、直ちに惡道地獄に転じ變つて今の百倍の苦しみがある。これは外から招いた地獄ではなく、人々が自分で作り出した地獄である。今生と来世の苦しみを全て総括して、輪廻の苦しみというのである。この輪廻の苦しみを免れて大安樂の境地に到ろうと思うならば、直に成佛の道を知らねばならない、と（拔隊禪師は）言われるのである。

直にというのは、間延びしたことなく、只今まっすぐに直に成佛の道を知らねばならないというのである。直にというのは、死んでから後のことではなく、只今生きている間のことである。成佛の道というのは、佛に成る道ということである。大半の世間の人は、今生で後世というものをよく願えば、死んでから後に何となく佛というものに成るように推量しているが、成不成の所以も確かに知っていないのに、愚かであること甚だしい。

眞実の成佛を遂げるといふことは、只今直に一心を悟つて不生不滅の完全な当体に十分到つた境地をいふのである。このように十分に到つた人を、佛とも大菩薩とも名付ける。佛道の本筋極意は皆この通りであり、どうしてどうして我々に疎遠なことではない。自心を悟るといふのは、自分の一心を悟るといふことである。悟りといっても格別のことではなく、只一心を明らかにすることである。悟りを明らかにすることは、元来同じ意味の二つの言葉である。

世間の人は、悟りというのは佛や菩薩の再来などと言われる人にして初めて可能で、普通の人は極めて成就し難いように思っているが、これは大きな誤りである。明らめると言えば、誰しも成就しやすいように思いこんで、私はこのように明らめたとか、あの人は明らめのよい人である、と常日頃語っている。元来悟りとは明らめることをいうのである。随分と工夫信心して、自分の一心を明らめた境地を悟りというのである。

この一心を悟る工夫信心は、世の迷いの凡夫のみがなすべき信心修行である。佛や菩薩は悟ったおかげで佛や菩薩という名を得られたので、佛や菩薩の再来と言われる人だけが悟れるというのは、大いに誤っている。それ故に諸経の中には末世のために説くと言われているのである。

よくよくこの道理をわきまえて、常日頃油断なく心の修行をして、すみやかに成佛しなければならない。たった今臨終ということになれば、一体何をもって臨終の苦しみに対処できるというのか。どうか、のどが渇いてから井戸を掘るような愚かなことをすることのないように。

十九、分別妄想の弁別を示すこと

一人の士が来参して問うて言った。前日より和尚様の有難いご指示を頂いて工夫をしましたが、分別妄想が増々盛んさかになっております。この妄想分別が尽きなければ、一心を悟ることは不可能と思われませんが、今一度垂語をお願い致します。

師は言われた。元来この工夫修行は妄想分別を払い尽すための修行でもなく、気持ちを整めるための修行でもない。ただ念が起るうが気が静まるうが構わず、ただ深く工夫して一心を悟るための修行である。分別を払い除き、気を静めるのは、小乗や外道仙人などの修行である。紫朱黑白を明確に区別して混同してはならない。

釋尊はお経の中でこれらのことを譬喩ひゆを引いて説かれている。その喩たとえは次の通りである。山嶽の奥深い場所に一つの岩窟いふくが有り、人跡不到で大層暗い岩窟であった。二人の男がいて、この岩窟の処に到った。一人の男が箒ほうしで岩窟の暗闇を払い除こうと力を尽したが、暗闇は一向に除けなかった。いよいよ力の限りに毎日払い続けたが、遂に暗闇を除くことは出来なかった。そこでその男が火をつけて岩窟の中に入ったところ、今までの暗闇はたちまち消え失せて昼のような明るさとなった。火をともして入ると、暗闇は尽きるといふ様子もないままに、たちまち失せてしまった。

人々が一心を悟ることもまたこの通りである。一心を悟れば妄想分別が消え失せることは、ちょうど岩窟に火をともして入れれば暗闇がたちまち尽き果てるのと同様である。釋尊は火をともして入ることを、一心を悟ったことに喩え、箒で暗闇を払うことを、妄想分別を忌み嫌って除こうとすることに喩えられたのである。人の心は昔も今も同じで変らない。火をともして入ることが肝要である。暗闇を払い除こうとするのは愚か者である。

二十、近侍の僧に示すこと

師の身近でお世話をしている僧が、しばらくの間、行脚遊方あんぎやして他の或る寺の長老に相見あひみした。長老は問うて言った。澤水老師は日頃どのように修行者達にご垂誠の言葉を述べておられるのか。僧は言った。老漢は日頃、万事を放下ほうげし、諸縁（諸々の煩わしい関わり合い）を忘れ果てて大疑を起し、佛祖のように直に自性を悟らねばならぬ、と申されております。長老は言った。澤水老師の示す所は大いに誤りである。僧は言った。これまでの佛祖のお示しは皆その通りであるのに、一体澤水老師のどこに誤りが有りますか。長老は言った。六祖大師が「本来無一物である。どこに塵やほこりが寄りつくというのか」と言われているのをご存知であろう。本来無一物の所に強いて疑團工夫をして、一体何を悟ろうというのか。もし真実に悟るべきものが有るならば、六祖大師はどうして本来無一物と言われるであろうか。このことから知れるのは、澤水老師は学人をたぶらかし惑わまどしているということである。

僧は憤慨して抗弁の限りを尽したが、長老を説き伏せることは出来ず、十日余りたつて帰庵し、師にそのことを一々申し上げた。すると師は叱しかつて言われた。お前は日頃から信が足らぬから、その程度のこと
で他の長老にへこませられ欺あやかれるのだ。どうして、六祖壇經（六祖の語録）の中の大師の言葉を用いて、
真一文字にその長老を論破して、無一物底ていに尻しつぽんをすえる空見の者を正見しょうけんに転じてやる事が出来なかつた
のか。

僧は言つた。壇經の中に、無一物を破り却しりぞけるような言葉が一体有りましょうか。師は言われた。はつきりと有る。お前は幼い頃から壇經を眼に見て、口には誦うていながら、その様な情ない不覺をとるのは、
信が十分でないからである。六祖大師が修行者達に示して、「私には一物が有る。頭も尾も無く、名も字
も無いものであるが、諸君はお解りかな」と言われているのを知らないのか。僧は驚いて罪を悔くいた。師
は言われた。これを無一物と言おうか、有一物と言おうか。もし本当に無一物ならば、大師がどうして「私
には一物が有る」と言われようか。このことから分かるのは、文通りに意味を理解すれば、それこそ三世
の諸佛の敵であるということである。（澤水老師にこう諭さとされて）僧はこれ以後深い工夫に没頭すること
となった。

二十一、文字のじつ、山居の可否を示すじつ

或るとき僧が来参して打ち明けて言った。私はもともと佛道修行の志が有りましたが、不幸なことに自分の師匠が早く遷化（せんげ）（逝去）したので、素志を遂げることが出来ませんでした。現在は住職の身なので、文字や書物なども見なければ寺の役職も果し難く、山居して修行したく思つてはいても、今の事情がそれを許しません。ともすれば、日常用いる文字言句は修道の妨げとなると思いますが。

師は言われた。この一心佛性は文字言句などに惑わされ縛られるようなものではない。文字言句はずつと後に人が分別や才覚によつて作り出したものである。この人々の一心というのは人の作り出したものではない。天地未分（宇宙創成）以前から、自ずから明々として、今に到るまで色を変えることなく、十方世界に遍く満ちている。日頃深く工夫して一心を明らかにし、天地と我と一体の境地に到つたのを成佛作祖の田地（ぶつち）（佛祖の境涯）と言つが、釋尊や諸祖師の眞実の説は皆この通りである。

多忙で繁雜な寺の役職を勤めながら、深い工夫をしなければならない。ともあれ文字言句を忘れ果てる位に工夫しなければならない。山居のことは結局何の益もない。この一心は場所や環境によつて改善されるものではない。どれほど山中の静かな所に居ても、もとの散乱した心を伴つて行くならば、静かな所に居て増々散乱するだけである。六祖大師は「道は心によつて悟るものである。どうして坐に在るであろうか」と言われた。この一心は坐にもよらず住む所にもよらない。どこに居ようと只親切に（間断なく切実に）工夫しなければならない。場所や環境によつて悟ることではなく、只工夫によつてのみ悟るのである。

二十二、戒行を示すこと

一人の士が来参して問うて言った。和尚様のかたじけないお示しを受けて以来、信心の怠惰は有りませんが、この頃思うのに、五戒くらいは保たないと、結局工夫も無益であらうし、もし又五戒を保てば、世間との交わりに差し支えがありましよう。この道理はどの様にすればよろしいでしょうか。

師は言われた。この工夫修行は、佛道の本筋、成佛の近路で、全然狭いものではない。老僧が日頃示している様に、聞く主何物ぞと間断なく路を行く時も工夫し、家に居る時も働く時も、寝ても覚めても深く工夫すべきである。読んでいる時、書いている時、計算している時は、工夫がやりにくい。そういう用事が終れば、直ちにまたもとの通りに工夫すべきである。

毎日この様であれば、五戒や十戒など物の数ではない。日頃が定共戒（禅定に入る故に身語の過非が失せること）であり、万法戒を保つことになる。戒というのは心の戒である。大唐の径山寺の額には、「百千の佛像を建立するよりは、一句自然（佛法の端的）を悟るべきであり、数限り無い戒行を保つよりは、心の一戒を保つべきである」と書かれているということである。もし老僧が示す通りに工夫をせずに万法戒が保てるというのならば、こういう道理は有り得ないはずである。

士はまた問うて言った。時々世渡りのことについて分別をしてしまうことが有りますが、工夫の妨げとなるでしょうか。

師が言われた。公用や私用や世渡りのことには分別を使って十分に都合よく対処して、全てのことが普通のひと少しも変りないように心掛けて、少しも人を侮あなどることなく、専ら両親を大切にし、主人の有る人は、主君のことをわが身のことを考えるように考え、位の高い人をどこまでも敬い、下賤げせんの人を十分憐れんで、さてそこで日頃の無益な分別じようけん了簡は捨て去って、この工夫信心に取り替え、いよいよ深く工夫すべきである。

士は喜んで帰って行った。

二十三、 釋尊在世の時の教化の仕方を示すこと

師は或る時修行者達に示して言われた。三千年に一度開くという曇華どんげに逢うことが有っても、この大乘の正法しやうぽうを聞くことは至難なことである。釋迦如来が四十九年の間、偏円半満の説や權實頓漸ごんじつとんぜんの教えなど、衆生の根機に順じて法門がさまざまに分かれていますといえ、また菩薩や祖師方の論や語録が、あたかも病やまいに應じて薬の処方が無数で有るように、数多く存するといえ、つまりは今日人々の自性じしやうを悟らせようとする一片の大悲心に他ならない。佛祖や聖賢せいけんの洪大こうだいな恩を、ご銘々が忘れてはならない。

昔、靈鷲山りょうじゆせんの会上えじようで、釋尊が在世ざいせされていた時は、僧俗を區別することなく、信者を分類別局して導かれたと聞いている。法理に鋭く直じきに工夫信心に入る者を、同類を集めて一所に修行させられたのである。以下、中乗と小乗の類たぐいもまた一所に集めて修行させられた。名号みかうを唱えたり写経や誦経を好む信者は、また同類を一所にして信心させられた。この様に一切の人を見放されることがなく、衆生を利益りやくすることが廣大であつた。

さて釋尊は信者の時節の熟未熟を見抜かれて、中下ちゆうげの信者と名号や写経などの信者に言われるには、お前は長い間信心しているが、今の修行より外に素晴らしい修行が有るが、その修行をする気がないか。信者は言つた。これより外に一層よい信心が有れば、世尊よ、どうして先年からその修行を指導して下さらなかったのですか。世尊は言われた。お前は先年は剛情で（指導しても）なかなか言つことを聞こうとしなかったが、長い年月写経や名号を修行した徳のお蔭で、今日この様になつたのである。信者は言つた。この外に一層よい修行があれば、すみやかにお教え下さい。世尊は言われた。今はまだ早かろう。この様に三回四回とやりとりされて後に心地工夫に入れさせられた。その他の信者もこの様に導かれたということである。

ところが今時は、法理がはつきりして直じきに一心を悟る修行に入る方がよい人にも、名号や題目、或いは誦経をさせたり、理にうとい信者にも長年の信者にも、題目や名号、或いは写経をさせるなどして、一生をはしご的方便のただけに押し留めて、這箇しゃこの玄旨（向上の極意）を埋め去つたままにしている。まことに残念で悲しいことだ。

譬え、医者がいて、風邪にも敗毒散を与え、寒気あたりや暑気あたりにも敗毒散を与え、その他、気血痰や虫腹（回虫による腹の痛み）にも敗毒散を与えと言つならば、この様な道理は筋が通らない。釋尊や祖師方の本意は、果してその様なものであるうか。

他方、もし上述の道理を深くわきまえて教化し、信者の方もまた上述の道理をよくよく心得て信心するならば、百川が自然に大海に歸するのと同様に、また枝葉がそれぞれ根株に歸っていくのと同様に、一切を攝取して捨てることなく、衆生を利益すること誠に広大なるものがある。

二十四、學問の次第を示すこと

一人の僧が相見して問うて言った。和尚様は日頃僧徒が學問することを嫌われていると聞き及びましたが、本当でしょうか。

師は言われた。老僧は元來大いに學問好きである。どうして學問を嫌おうか。僧が言った。それならば、僧徒にどの書物を學ばせられますか。師は言われた。世間の一切の書物を一つ一つ學ばせるのだ。僧は言った。一切の書物といつても膨大な数です。偽りを言われているのでしょうか。師は言った。どうして偽りを言うものか。およそ世間の一切の書物は、儒書か、神書か、佛書か、老莊の書か、軍書か、医書か、歌書かであるうが、これらはいずれも身の持ち方、心の摂め方のみを説いている。老僧は日頃これらの書物に少しも背くことなく、どれも皆用いている。どうしてこれが學問を嫌うということになるのか。

大徳（貴公）が云っている学問というのは、どのような学問なのか。日頃眼に視たり、口に誦したりしていても、その書物の教えの通り学ばなければ、学問とは言えない。学問というのは、書物を見て、その教えに少しも背かず（そむ）に身の持ち方や心の摂め方を学ぶのを、学問と言うのである。もしまた身心の他に書物が有っても、そういう書物は学ぶ必要が無い。お経（金剛般若経）には、「法ですら捨てるべきである。まして法でないものは言うまでもない」と述べてある。実参実悟に達するには、法ですら捨てるべきであると言うのである。まして法でないものは言うまでもない。このことを思い、慎まねばならない。

二十五、絶学の次第を示すこと

僧が来参して申し上げて言った。私はこの五、六年の間、筆硯（ひっけん）を使用せず、書物にも触れず、絶学の状態で日頃工夫三昧に打ちこんでいますが、未だ大事究明の時節が到来致しません。どうかお示しをお願い申し上げます。

師は言われた。工夫は、只疑いが深く、横道にそれずに一則の公案を提撕（ていせい）すれば、了悟の時節が定めし有るものである。了期（りょうこ）（徹底の時節）が無いのは、只工夫の疑いが弱いがためである。大疑の二字は千語万句の要（かなめ）である。さて只今、絶学と言われたことは、大きな誤りである。絶学とは悟した人のことである。真覚大師の証道歌には、「絶学無為の閑道人」と言われている。筆硯を手にとらず、一巻の書物にも触れることなく工夫修行一偏の人は、学人と言うので、絶学とは言わない。臨済和尚を始め、修行底（てい）の人を学人と呼ばれている。一言半句でも誤りが無いことが肝要である。

二十六、儒釋道の次第を示すこと

一人の僧が問うて言った。儒釋道と言い、儒佛神と言いますが、この三道や四道は一致すると聞いております。その場合、釋尊、孔子、老子、天照大神、という方々の見処けんじょは、どれもこれも千斤の重さで、少しも輕重けいちゆうの違いはないのでしょうか。

師は言われた。佛祖や聖賢及び諸道や諸伝灯などは、途みちを異にし轍てつ（わだち、車輪の過ぎたあとのくぼみ）を同じくするとはいえ、もし比較するとすれば、全く輕重淺深がない訳ではない。

僧は言った。いずれを輕とし、いずれを重とされますか。

師は言われた。門より入るもの（外からのもの）は家珍かちん（家宝）ではない。大徳よ、日頃前後左右を脇見せずに、純一無雜じゆんいつむざつに工夫すべきである。生死事大、無常迅速じんそくである。臨濟禪師が、「君達が久しく住む所では無い」と言われているのを、ご存知であろう。たとえ諸学者の万論を学び尽したとしても、また数知れない佛の言葉や聖人の本意を聞き得たとしても、全ては一場の夢であり、いつ死んで白骨となつても不思議ではない。妄想の一念一念を、頭の燃えさかるのを消すようにして断ち、すみやかに見性すべきである。真実に見性分明けんみんめいぶつであるときには、佛祖や聖賢や諸伝灯や歴代の諸祖の輕重や淺深などが、掌中てしやうちゆうのものを見るかの様に分明となる。その時初めて、これは輕、これは重、これは淺、これは深、これは偽り、これは真実、ということが知れるであらう。

二十七、白骨の大厄たいやくを示すこと

一人の士が来参して問うて言った。世間では二十五歳の厄や四十二歳の厄といっていますが、これは本当のことでしょうか。

師は言われた。二十五歳の厄とか四十二歳の厄は、余りに些細なことなので別に論ずるに足らない。(それよりもどの人にも一つの大厄が有るが、貴方は果してご存知か。どの人にも有る一つの大厄とは、高位高官であろうと、賢愚貧富の人であろうと、誰しも皆有る白骨の大厄である。この白骨の大厄を、何を祈って免れることが出来ると言うのか。愚かの極みである。

この士がまた問うて言った。神道では生れたのを穢けがれとし、死んだのを穢けがれとしたことが有ります。もし本当に死を穢れとするならば、神を祭るに際して魚肉を献ずることは、合点が行きません。魚肉はもと畜生の死んだものです。天照大神や諸神は、どうして人を避け嫌って畜生を愛されるのか。神に有るまじきことです。どうか和尚様のご教示をお願い致します。

師は言われた。天照大神の本志は貴方の推量とは雲泥の違いが有る。神道の人が、生れたのを穢れとし、死んだのを穢れとしたことは、大層深い道理が有る。今貴方のために、それを語ろう。しっかりと聞いてもらいたい。

元来人々のこの身と心とは、毛頭^{もうとう}も生滅の相もなく、去来の相もない。ところが凡夫はこの道理を知らずに、生れたと言つて喜び騒^{さわ}ぐことは、聞きたくもない穢^{けが}わしいことで、本来死ぬということがない所に、死んだと言つて嘆き悲しむことは、聞きたくもない穢^{けが}わしい、ということである。天照大神のお示しは本来この通りである。世間の人があるの根源を知らないで、誤つて神靈^{おみ}を侵^{おか}して、乱^{みだ}りに神道の人を非難することは、大きな過^{あやま}ちである。世間の一切のことは、その根元を徹底的に見聞きして知り尽すことがなければ、是非を論じてはならない。

二十八、学徒の日頃の用心を示すこと

師は或るタベ、修行者達に示して言われた。古人は「參は実參でなければならず、悟は実悟を要する」と言われた。いささかでも懈怠^{けたい}の心を生じてはならない。この事は大海に似ている、入れば入るほど増々深くなる。悟処は際限が無く、達処は窮^{きわ}まりが無い。天も自己佛性^{ぶつじょう}より湧^わき出で、地も自己佛性^{ぶつじょう}より漏れ出で、日月や草木国家山河も自己佛性より漏れ出たのである。この様に十分到了た人を法王と名づけ、成佛の境界と言つのである。諸禪者よ、容易の念を起してはならない。

世間の技艺や剣術や書道の指南でさえ、十年二十年の修学では妙処を尽すことは難しく、師の道を修得し難い。まして佛道の大導師はなおさらである。ちょうど書道を例にとると、三年本當に習えば、三年分の達成が有り、十年習う時は、十年分の達成が備わる。そこでよい師を選んで、その上を尽せば、どの様な能書にも到れるし、更にまたその上を修すれば、世間に比類のない人になることも出来る。

心地の修行もまたその通りである。幾度悟処いくたひが有つても、直に旧見じききゅうけん（これまで体得した見地）を捨て去つて、初心の時の心になり、もとの通りに大疑情を起して、ことごとく修し尽さねばならない。性相一如（現象が本体の佛性とピッタリ一つになること）は至難である。古人が十年二十年、或いは身を終るまで、粉ふん骨碎身の工夫をされたのはこのためである。

禅者達よ、托鉢に回る時も、工夫三昧でいて、施者の男女の相や家の貧福を差別してはならない。これはまた諸佛の規範である。禅者達よ、日頃気をつけて、飲食の節を失つてはならない。食は道の基本である。間食を食べてはならない。多食や飽食をしてはならない。願わくは、この身が勇壮なうちに、すみやかに大事を究明するようにしてほしいものである。

住所は只その師を選んだ上で決定すべきであり、衣食えじきに左右されてはならない。工夫の時、壁にもたれてはならない。四方に触れることなく、正身端坐しやうしんたんざすべきである。工夫に懈怠心が生じた時には、この身が仮初かりそめのはかないもので、老いも若きも全て白骨となることを観すべきである。如来もお経の中で、昼三度、夜三度、白骨觀をなすべきであると説かれている。

工夫は只公案を深く疑うべきである。深疑の二字は、一切蔵經や百千の論や祖録や千句万語かなめの要である。工夫の時には禅境（魔境）が有るものである。人の顔や鬼や佛や花の形が現れ、或いは通身清淨しやうじやうじやうや女の姿、或いは通身が無くなったかのようなことが有るが、これは工夫の際の疑いが弱いたためである。切羽せつぽつまって間断無く工夫する時には、禅境に執着する心は無くなる。心にすぎが有るために、種々の障害が生ずるのである。畏おそれたり貴おそんだりしてはならない。この時によいよ深く疑うべきである。

禅者達よ、工夫に昏沈散の病が有るが、これを知っていなければならない。昏とは眠りであり、散とは散乱である。この二種の病は誰しも知っているが、沈の病は最も知ることが難しい。工夫する人の十人に八、九人はこの沈病になって災いを招いている。沈病とは眠りでもなく、散乱もなく、妄想の念慮が全て尽きたようで、しかも心が慶快清浄で、長時間坐禅しても疲れず、天地も一枚平等の様で、空でもなく、寂でもなく、有無是非でも無いと思う。工夫する人はこれを認めて悟道と思う者がいるが、甚だ畏るべきことである。

ここに尻をすえれば、以後は邪路に落ちてしまう。その様な気配が生じた時は、一切を放下して増々大疑情を起すべきである。禅者達よ、決して老僧の言葉を誤り聞いてはならない。禅者達よ、僧侶は女性のこと、魚肉のこと、金銀のことを、全て語ってはならない。これはまたこれまでの高德の祖師方の誠めである。

禅者達よ、昔も今も、幽霊や亡魂（亡くなった人の靈魂）や亡人（ひとだま）の説、或いは神木や古木から血が出るとか、或いは古い石佛や石地蔵の類が化けたり夜行したりするという説などは、全て信じて取りあげてはならないし、また他人に語ったりしてはならない。天地の万物はそれぞれ佛性を具えているから、奇怪で珍奇なことが無いはずは無い。もしその根源を知ろうと思うならば、ご銘々が何よりもまず自心を悟らねばならない。

ここで師は^{ほっす}松子（法要道具の一種）を眼前に突き出して言われた。這箇（こいつ）を見ても直に悟ることが出来よう。禅者達よ、会得^{えとく}されたかな。元来、大道というのは修行の力を通して漸く成就するものではないのである。（この松子を見るのも修行したから見えるのではないのである。）これだけ言っても会得出来なければ、自己の本心本性に向かって大工夫をすべきである。

拾遺

一、

或る時、念佛誦經の信者が、師のお示しを聞いて工夫修行に取り組んだ。その信者が或る時やって来て、師に打ち明けて言つた。先日以來、和尚様のお示しに従つて工夫をして参りましたが、ややもすれば以前の念佛誦經をしてしまい純一になれません。いずれが眞の信心でしょうか。疑心が大変多いのですが、どうか再びお示し下さい。

師は言われた。元來、道理が分明ぶんめいでない時には、二つ物どりというように考え、これは道理の重いことであり、これは道理の軽いことであるとして、何事も道理の軽い方を捨てて重い方に随したがひ、厚い方を取つて薄い方を捨てるべきである。この様でなければ、何事にせよ通達した人とは成り難い。

釋尊がお經の中で喩たとえられたことを、今貴方のために語ろう。至心に聞くがよい。まず二人の兄弟がいた。或る時その二人が深い山中に入って大層苦勞して薪まきを伐きつて、銘々がその伐つた薪を背負つて山を下つて間もなく、道端みちばたに銅が沢山有るのを見つけた。弟はそれを見て背負つていた薪を打ち捨てて銅を背負つて歩いたが、兄は、これほど苦勞して伐つた薪を今更さ打ち捨てるのは惜しいことだ、後でやって来て

銅を採ろうと思い、とうとう銅を採らずに、その薪を背負って帰って行った。路を八、九町（一キロ弱）も下ると、また道端に銀が沢山有ったので、弟はこれを見ると先程と同様に、銅を打ち捨てて力の及ぶ限りの銀を背負って歩いたが、兄は又、これほど苦労して採った薪を打ち捨てるのは惜しいと思い、薪を背負って銀を採ることはしなかった。路を一里（四キロ弱）ほど行くと、また道端に黄金が沢山有ったので、弟はこれを見て、すぐさま銀を打ち捨てて、背中也破れるほど一杯の黄金を背負って帰り、兄は又これまでも同じ思いで薪を背負い、黄金を採らずに家に帰った。兄が後で例の銅銀黄金の有った所に行つて見ると、跡かたもなく、終に空手で帰ったということである。

釋尊がこの様に喩えを示された大悲願の有難さは、後世の人達が何をもつてこれに報いればよいのか手立てがないほどである。人々が今日たまたま大乘の真実の佛法を聞いたとしても、智識（明師）の示された通りに修することがなければ、前述の、銅銀黄金を採ることも出来ず、ただ徒に薪を背負う人に似ている。道理の輕重（けいちゆう）に関しては、銀や黄金を採ることの出来た前述の弟の様にすべきである。樊臈（漢の高祖の忠臣）も、大功は些細な過失は度外視すると言った。世間の大功を遂行しようとする人ですら、この通りである。まして今日、愚かで道理に暗い凡夫の身で、生きながら成佛が出来るというのは、まさに大功と言えるのではないか。それなのに、人の譏（そし）りやあれこれの障害や余計な心配りに縛（しば）られて、量り知れないほど貴い宝物を永遠に失ってしまうのは愚の骨頂ではないか。

一一、

師は常に示して言われた。如来は遺教經ゆいぎょうきやうにこう説かれている。「比丘達よ、もし努力して精進しやうじんすれば困難なことは何もない、それ故に是非とも努力して精進すべきである。精進すれば、ちようど少量の水が常に落ちて石を穿うがつことも可能となるようなものである。また修行者の心が再三懈怠けたいするならば、それはちようど木と木をこすり合わせて火を得ようとする場合、まだ熱くならないうちに手を休めれば、火をつけるのが難しいようなものであり、これを精進と名付けるのである」と。

師は又言われた。木の中から火を得ようとする人は、火が出ることを見極目標として退屈せず木をむねば、火は必ず出るが、もし途中で止やめてしまえば、どうして火を得ることが出来るであろうか。工夫疑團もちようどこの通りである、よくよく反省しなければならぬ。

一二、

師は常に示して言われた。諸大徳よ、常に飲食の度を失してはならない。身体を養い、生命を全まもうすることは、ひとえに飲食の二事に懸かかっている。常に大食してはならない。その食物が果して身体に良いか悪いかをよく弁わえて食べるべきである。その時にはその食物が身体に良くないことが分からなくても、終ついには病氣の原因となつて、急死や横死などの思わぬ災いを招くことがあるので、美味な物や粗末な物も共に大食してはならない。

食事は飢を止める為のものであり、衣服は寒さを防ぐ為のものである。それ故、如来はお経の中で、「比丘達よ、さまざまな飲食の供養を受ける際には、ちよつど薬を服する様にすべきで、好き嫌いに関わらず増減してはならない、わずかに我身を保つ為に飢渴を除くべきである」と言われている。

又常に慚愧すべきである。古人も白法を用いて無上道を成就されたというが、白法とは慚愧のことである。自分は幸いにも無上道を聞いていながら、まだ成就していない、この身のはかないことは本当に空花（眼病の者が空中に見る実体のない花）に似ている、この我身もいずれは白骨となってしまうというのに、（無上道を成就できない）このような不信心は一体どうしたことかと、自らを誡め鞭打つて、只常に聞く主の知られない所を深く疑うべきである。拔隊和尚は、「深く疑えと言つのも、何とか悟らせたいが為である」と言われた。大疑工夫の外の一切の事、一切の業は、皆ことごとく枝葉末節である。この様に常に慚愧して今日も明日も日々に進み、夜毎怠らなければ、誠に至道無難（至極の大道もいとやすい）であろう。

四、

師は、或る夕方に示して言われた。古今高僧方の法語や語録は数多いが、その中でも極めて重要なものは到つて少ない故、十分に邪正を弁え、是非を擇ばねばならない。（そういう語録のうち）或いは知解（分別的解釈）に走るものも有り、或いは活達（物事にこだわらぬ境涯）に走るものも有り、或いは殊勝（神妙な様子）に墮するものも有るが、これはいずれも法の病である。よくよく擇び用いなければならない。

真実に見性して釋尊や諸佛に少しも相違しない時は、殊勝に見えて殊勝ではなく、活達に見えて活達ではない。或いは活僧と見え、或いは殊勝と見える様な人達は、古人の知識（名僧）と呼ばれた中にも数多く見受けられる。とはいえ見性体験がない訳ではない。ただ真実に修行し尽さない為に、未だ大悟大徹の域には至らないのであり、徹底して修行し尽していないが故の誤りである。その為に説法にも不十分な所があつたり、また不十分だけではなく、誤謬も所々見受けられる。よくよく細心の注意を払わなくてはならない。

只修行する人の大工夫というべき工夫は、只公案を深く疑うべきである。深く疑えというのは、成佛の根本、仏法学の最重要事である。真実に見性悟道した人は、殊勝であるべき時は殊勝に、活達であるべき時は活達に、急ぐべき時には急いで、ゆっくりすべき時にはゆっくりとし、柔軟であるべき時は十分柔軟に、激しくすべき時には存分に激しくするという風に、臨機応変に自由自在の働きが出来るのである。これは思慮分別の測り知ることが出来る所ではない故に、鬼神も知り得ず、外道や波旬（魔王）も穴のぞきも出来ず、佛眼にも見ることが不可能である。まして凡夫の眼に、奇妙だとか不思議だとか殊勝だとか活僧だとか見えるのは、全て凡夫の妄想の働きである。

五、

師が示して言われた。世の中には全て浅薄で皮相的な有相信心の説だけが横行していて、この大乘の正法を説く者やそれを聞く者は、千万人の中にも極めて稀である。この為、如来の本懷であるこの大乘の本

法を興隆しようと思えば、並大抵でない心懸けがいる。

昔、釋尊も一方の導師ともなることの出来る諸大菩薩に言われたことがある。佛法の普及していない国土に私の説くこの正法を興そうとすれば、高慢で邪惡な輩が必ずやさまざまな妨害を加えるであろうが、その時貴方達はどの様にすべきか。

諸大菩薩が答えて言った。たとえ邪見で高慢な輩が我々をさまざまに惡口を言い、罵り、辱めようともしも怒らず、恐れずに、一切の誹謗や恨みをことごとく堪え忍ぶ積りです。

如来は言われた。その様な浅はかな心懸けでは、邪見無法の只中でこの大乘の正法を興隆することは到底出来るものではない。邪見無法の輩がたとえ刀や杖で打ち叩き、或いは毒藥を盛り、或いは鼻をそぎ、目をえぐり、腕を切断し、脛を折ろうが、全然見ず聞かずという風に、心を大死人（分別意識の絶え果てた人）の様に保って、全く以前のことに関わり合ってはならない。もしこの通りに成らなければ、大法を興すことは出来ない。またこの無上道を軽々しく人に語り聞かせてはならない。かえって謗りを招いて甚だ法に有害となるので、慎むべきである。（とはいえ）相手から尋ね求めるのであれば、いささかも惜しむことなく存分に説き示せばよい。

六、

師は、常に示して言われた。貴賤を区別せず、賢愚を論ずることはしない。どの人も母親の胎内に宿り、鼻口眉目が次第に完全に具わって、十月がたつて出産したのであるが、鼻や眉毛の様子や口や眼の体裁は、百人千人いても少しも異なることなく（同じ場所についている）。誠に巧みな技と言つてよいが、これは果して何ものの技であるつか。このことを考えるだけでも、とても簡や分別知解の及ぶことではない。こういう事実に出会つて、自心を悟ろうとする志が起らないのは、愚かこの上ないことである。

さて又、日月の運行に關しては、夜が明けると明るくなり、日が暮れると暗くなるが、これは一体何の道理であるつか。不思議で奇妙なことは日頃目の当りにしているものの、ただ人々は生まれ落ちて以来、見慣れ聞き慣れてしまつて、つかつかと気が付かずに、そのうちの人も白骨となつてしまふという現実をも省みず、ただ日々の生活のこのみを一生思い煩い、心を悩まして飽き足ることがない程であるが、その終着にはどれだけの楽しみがあるのかと思えば、遂には無間地獄に落ち込んで、そこから遁れ出る手立てもなくなる。誠に憐れで悲しいことではないか。今述べた道理を少しでも心に留めようと思つ人は、拔隊法語をよくよく拝読されるがよい。

七、

師に帰依^{きえ}している信者が或る時師に申し上げた。先日、禅の宗旨に関心の有る人と共に語り合った際に、私は次の様に語りました。この身は限り有つて必ず変滅するが、この心は不生不滅で終^{つい}に変易はない。それはちょうど火事の時、家屋が焼滅しても主人は走り遁^{のが}れ出る様なもので、この身が滅する時に、魂は外に走り去る筈^{はず}である。

師はこれを聞いて大いに叱^ちつて言われた。大変な誤りで、外道^{げどう}の悪見識である。昔、大恵和尚が或る日或る居士の宅を通り過ぎた、居士は壁間^{へきかん}に白骨の形を描き、その横に「死骸^{しがい}はここに有るが、その人はどこに居るか。つまり靈魂は身体の中に存在するものでないことが分かる」と書いていた、大恵和尚はこれを見て大いに叱^ちつて、この偈^げは貴方が作つたものか、これは外道の悪見識であり誤っていると言われ、その偈を作り直して、「この形骸^{すがた}は便^{すなわ}ちその人である。一靈の身体、身体の一靈」と書かれた。このことから知れるのは、今又、貴方も誤っているということである。

元来この身にも少しも生滅^{さた}の沙汰はないが、ただ貴方が信心不十分である為に、種々の妄念が止むことがないのである。今日より志を改め、徹底した修鍊を積むべきである。断じて老僧の言葉を誤解して受け取ったり、或いは世智の小ざかしさに心を奪^{うば}われたりして、万劫^{まんじょう}（永久）の災いを招いてはならない。抜

隊は、「本当かつそか、急に眼を付けて見よ」と言われたが、実にその通りである。直ちに実悟見性すれば始めて分かるであろうが、日々に莫大な黄金ばくだいを供養するほど老僧に帰依きえしようが、又老僧の大小便をなめるほど老僧のことを思つて献身的に尽そうが、真実に大疑工夫に専念しなければ、誠の帰依きえではない。たとえ又今述べた十倍の献身的孝行をする人であっても、大疑工夫をしなければ、一体どうしてこの一心佛性を悟ることが出来ようか。光陰を惜しむべきである、時は人を待つてくれない。

八、

師は或る時に示して言われた。この大乘直示の法を明らかにしようと思うならば、工夫修行に精進する気持ちを持続けることである。それ故に如来はお経の中で喩えを引いて次の様に説かれている。

大金持の人がいたが、この人が或る時、長年心おきなく交際して来た男に言つには、私は今貴方に大金を与えよう、それは貴方が働かなくても安心して一生暮らしていけるほどの大金である。今貴方の家の中に置いたので、探し求めて使つたらよい。

お金をもらったその男が自分の家の中を探したところ、そのお金は見つからなかった。色々と心を廻めぐらして、戸棚やつり棚は言つに及ばず、鍋や釜、桶おけやお櫃ひつの中まで探したが、一向に見つからなかった。この男が思うには、あの人とは長年の付き合いで、他の人よりも一層懇意であるから、決して偽いつわりは有るまい、しかしお金が見つからないのは不思議である、これは自分の探し方が不十分でぬかりがあるためであ

ろつと、増々心を用いて、二階の梁はりの上やのきの隅まで探したが、お金は一向に見つからなかった。

そこで又、確かに有るはずだと思い、板はを外し、壁を倒し、柱を割り、屋根を崩して探したが、お金は一向に見つからなかった。又々思うには、これほど探して見つからないのは、きつと彼が戯れて自分を欺いたのであると暫く考えたあげく拳句に又思うには、あの人は元来真実の人であり、偽りを言う人ではない、必ずや、お金を探し出さねばならぬと、大肌をぬぎ、鋤すきや鍬くわなどで家の下の土を掘った。一、二メートルの深さに地面を掘ったが、お金は見つからなかった。しかしながら有ることは間違いないと心得て、大汗を流しながら地底に向かつて十四、五メートルばかりも深く掘ったところ、遂にお金を掘り当てたという。

心地の修行もまたちようどこの通りである。今日も明日も明後日も精進する気持を持ち続け、悟らなければ、増々精神力を励まし、心を新たにしてくまでも深く工夫をしてゆけば、百人が百人とも悟らないはずはない。只、自己の宝を得ることが出来ないのは、探し方が不十分でぬかりが有るためである。しかしながら又、古人のお示しにも、佛法で目をつくなということが有る。元来人々具足にんにんの佛法であるから楽しいことである。よくよく修鍊されたい。

跋

この法語の著者は諱は長茂^{いみな}、字は澤水^{あざな}と号し、越後（新潟県）の出身である。最初は上杉謙信に仕えていたというが、のち出家した。常日頃、拔隊^{ばうすい}得勝^{とくしょう}禪師^{ぜんじよう}の法語を熟読して、世間の人と交わらず、山林などに入って、拔隊の教えの通りに禅定を鍊^ねり、自心を究明すること数十年、遂に自心を徹見し、拔隊の宗旨を会得^{えとく}した。のちに中峯和尚下十四世の龜庵珠光^{まみ}に見え、一見して印可を授けられたという。そして江戸に大住庵という小庵を構えて大いに僧俗を教化すること百年余り、元文五年（一七四〇）世寿百六十歳余りにして病なくして遷化^{せんけ}した、と伝えられる。

この法語は、澤水禪師が求法の僧俗に対して垂示されたものを、その近侍の僧惠俊が聞くに随って筆記して、禅師遷化後の元文五年（一七四〇）に出版したものである。のち宝暦十三年（一七六三）に活明和尚が巻末に補遺を加えて上梓した。この現代語訳はこの増補版に依っている。この原文は、大正十年に刊行され近年再刊された『禅門法語集』全三巻の下巻に収録されているが、如何せん、幾多の誤植が見受けられる。本来ならば、厳密に原文を校正して併載すべきであろうが、実参実究の方々の便に資する為に、今回はそれを割愛した。とはいえ、古徳の稀有の法財を誤訳してはいないかと危惧する。お気付きの方はお手数乍ら、ご一報を賜りたい。

さて、この法語を一読すれば直ちに知れる様に、その境涯の円熟と見地の明白なることは比類がない。真箇の禅定を修して自心の根源を徹見するという核心を欠き、伝統的見解の受け渡しに終始している相似の公案禅に対して、この法語は真の工夫の仕方や真の公案禅の有るべき姿を挙揚するものと言えよう。白隠門下の子徹居士山梨平四郎がこの法語を聞いて発憤し、わずか兩三日にして身心脱落の好風光を体験したことは、宗門内では周知のことである。

澤水禅師ご自身も抜隊禅師の法語を読んで如説工夫され、大安樂大解脱の境涯に到られた。佛法に関心有る人ばかりではなく、全ての人々がこの道を究めるべき必要性については、この法語の中で十分に説き尽されている。この法語を読まれた方々が、単に佛法についての知識を得ようとするだけでなく、更に実参究の道へと歩を進められるならば、必ずや祖師方の為人^{いにとしやう}度生^{だうせい}の大悲心を感じ得られる時節があるであろう。

なお、この拙訳の上梓は、京都と萩の二つの坐禅会の会員各位の護法心にもとづく喜捨により初めて可能となった。深く感謝申し上げたい。願わくはこの功德をもって普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜんことを。

